

田辺町埋蔵文化財調査報告書

第2集

1981

田辺町教育委員会

田辺町埋蔵文化財調査報告書

第2集

1981

田辺町教育委員会

序

近年田辺町においては、宅地開発が進み昭和56年3月には人口が4万人を突破しようとしております。

このような状況下で、昭和55年度事業として田辺町教育委員会は興戸古墳群(水道管埋設用地)・興戸宮ノ前遺跡(住宅建設用地)・郷土塚古墳群(住宅建設用地)の3ヶ所の遺跡確認調査を京都府教育庁指導部文化財保護課奥村清一郎技師を調査指導者として迎え実施したものであります。

興戸古墳群の調査につきましては、町水道部ならびに土地所有者の方々から文化財保護行政にご理解をいただき完全保存をすることができました。

なお、昭和45年度事業として権現塚古墳発掘調査を実施しましたが、報告する機会が今までなく、ここにようやく報告することができましたことは喜びにたえません。

また、本町では大住車塚古墳が昭和49年6月11日に史跡指定をうけ、昭和50年度から史跡買上げに全力を注いでまいりました結果、昭和54年度に買上げが終了しました。今後の課題としましては、史跡整備の早期実現があり、また昭和56年度事業として遺跡の分布調査を実施し、破壊されていく文化財の保護に努めてまいりたいと思います。

今後、ますます文化財保護行政への関心が高まる中で、一步一步調査研究を積み重ね、住民の家である文化財が調和のとれたまちづくりを進めるために役立つことを願っております。

最後になりましたが、調査期間中には町民のみなさまはじめ関係各位のご協力とご援助をいただいたことを心から感謝いたします。

昭和56年3月20日

田辺町教育委員会

教育長 藪 下 撤 一

凡 例

1. 本書に収めた報告は、昭和45年度及び昭和55年度に田辺町教育委員会が実施した埋蔵文化財の発掘調査概要報告である。
2. 対象とした遺跡名、調査期間、報告の執筆者名は下表のとおりである。

遺 跡 名 称	調 査 期 間	執 筆 者 名
1.興戸古墳群	S.55.10.6.～ S.55.11.8.	奥村清一郎,西川英弘
2.興戸宮ノ前遺跡	S.55.10.23.～ S.55.11.27.	奥村清一郎,西川英弘 伊辻忠司
3.郷土塚古墳群	S.56.2.2.～ S.56.2.5.	西川英弘,齋野一郎
4.権現塚古墳	S.46.3.1.～ S.46.3.14.	江谷 寛,栗野 謙

3. 本書の編集は、田辺町教育委員会社会教育課課長 博田武則、社会教育主事 西川英弘が担当した。編集にあたっては、京都府教育庁指導部文化財保護課技師 奥村清一郎氏の協力を得た。

本文目次

1. 興戸古墳群発掘調査概報	
1. 調査に至る経過	1
2. 位置と環境	2
3. 調査経過	6
4. 調査概要	8
(1) 4号墳	8
(2) 5号墳	8
5. まとめ	12
2. 興戸宮ノ前遺跡発掘調査概報	
1. はじめに	19
2. 調査経過	19
3. 検出遺構	24
4. 出土遺物	24
5. まとめ	27
付. 興戸宮ノ前遺跡の堆積物の花粉分析結果	29
3. 郷土塚古墳群試掘調査概報	
1. はじめに	33
2. 調査概要	34
3. 出土遺物	36
4. まとめ	36
4. 権現塚古墳発掘調査概報	
1. はじめに	39
2. 位置と環境	40
3. 発掘調査日誌	41
4. 発掘調査の概要	43
(1) 遺跡の状況	43
(2) 墳丘の調査	43
(3) むすび	45
(4) 備考	45

挿 図 目 次

興戸古墳群

第1図 田辺町遺跡分布図	4
第2図 興戸古墳群位置図	7
第3図 調査地周辺地形図	9~10
第4図 4号墳実測図	11
第5図 5号墳実測図	13~14
第6図 5号墳出土土器実測図	15

興戸宮ノ前遺跡

第7図 興戸宮ノ前遺跡位置図	20
第8図 周辺地形図	21
第9図 遺跡断面図	22
第10図 No.2トレンチ遺構実測図	23
第11図 旧河道SD01東壁断面図	25
第12図 出土土器実測図	26

郷土塚古墳群

第13図 郷土塚古墳群調査地位置図	34
第14図 トレンチ位置図	35
第15図 第1トレンチ西壁断面図	35
第16図 周辺採集土器実測図	36

権現塚古墳

第17図 権現塚古墳調査地位置図	40
第18図 周辺地形図	42
第19図 断面図	44
第20図 出土土器実測図	46

付 表 目 次

興戸古墳群

付表1. 田辺町遺跡一覧表	5
付表2. 興戸古墳群一覧表	15

興戸宮ノ前遺跡

付表3. 興戸宮ノ前遺跡の堆積物の花粉分析結果	31・32
-------------------------	-------

梅現塚古墳

付表4. 第1・2・3トレンチ南壁断面考察……………45

付表5. 出土遺物一覧表……………46

図 版 目 次

興戸古墳群

図版第1 (1) 古墳群遠景(南から)

(2) 4号墳調査前全景(西から)

図版第2 (1) 5号墳調査前全景(東から)

(2) 作業風景

図版第3 (1) 調査地全景(西から)

(2) 4号墳全景(南西から)

図版第4 (1) 5号墳全景(南から)

(2) 同 上 (東から)

図版第5 (1) 5号墳北西部

(2) 5号墳北東部

図版第6 (1) 5号墳弥生土器出土状態

(2) 同 上

図版第7 5号墳山土土器

興戸宮ノ前遺跡

図版第8 (1) 遺跡遠景(北から)

(2) 調査地近景(北から)

図版第9 (1) No.2トレンチ全景(北西から)

(2) No.2トレンチSD01と東壁断面(西から)

図版第10 (1) No.2トレンチSD01完掘状態(南から)

(2) 同 上 (北から)

図版第11 (1) No.2トレンチSD01北岸(西から)

(2) No.2トレンチ北壁断面

図版第12 (1) No.7グリッド(南から)

(2) No.11グリッド(南から)

(3) 作業風景(No.2トレンチ)

図版第13 出土土器

図版第14 花粉の顕微鏡写真(1)

図版第15 同 上 (2)

郷土塚古墳群

- 図版第16 (1) 調査地全景(西から)
(2) 第1トレンチ完掘状態(東から)

図版第17 出土遺物

権現塚古墳

- 図版第18 (1) 作業風景(北から)
(2) 出土遺物(左一弥生土器, 中・右一伏見人形)
(3) 出土遺物(土師器皿)

1. 興戸古墳群発掘調査概報

1. 興戸古墳群発掘調査概報

例 言

1. 本概報は、水道管敷設工事(事業主体：田辺町水道部)に伴って、田辺町教育委員会が実施した、田辺町大字田辺小字丸山はかに所在する興戸古墳群の発掘調査の概要報告書である。
2. 調査の期間は、昭和55年10月6日から昭和55年11月8日までである。
3. 調査の組織は下記のとおりである。

調査主体者	田辺町教育委員会教育長	飯下徹一
調査担当者	京都府教育庁指導部文化財保護課技師	奥村清一郎
	田辺町教育委員会社会教育課社会教育主事	西川英弘
調査事務局	田辺町教育委員会社会教育課(課長 博田武則)	
調査協力者	田辺町水道部(部長 野村力)	
	北緒鶴藏、岸本薫(土地所有者)	
4. 調査後の遺物整理・図面整理・整図は、主に森本恭有・羽田雅道・南 旨光・小林豊彦が行った。
5. 調査を実施するに当たっては、高橋美久二(京都府教育庁文化財保護課)、鈴木重治(同志社大学)、江谷寛(大阪教育大学)、村井博(田辺町文化財保護委員長)の各氏から有益な指導・助言を得た。
6. 本概報は、調査担当者が分担執筆し、文責は本文の末尾に示した。編集は奥村が行った。

1. 調査に至る経過

昭和53年8月、田辺町水道部から田辺町教育委員会に対して、町水道部が計画している同志社配水池～田辺間における水道管理設工事に伴う文化財保護法上の問題について意見照会があった。当委員会では、『京都府遺跡地図』¹⁾に基づき、当該工事区域は周知の遺跡地にはかかっていない旨回答し、工事着手年度に再度協議することを両者で確認した。

昭和55年4月、町水道部より再度協議があり、工事区域内を両者の担当者が踏査したが、遺跡の確認はできなかった。その後、同年8月に京都府教育庁指導部文化財保護課高橋美久二技師の指導のもとに、再度工事区域内の踏査を実施した。その結果、田辺町大字田辺と大字興戸の境界(東西方向の尾根)上に、古墳の可能性があるマウンドを2基発見したが、このマウンドが工事区域内に位置するかどうか不明確であったため、町水道部から測量図面(現況図)を取り寄せ確認を急いだ。

同年9月になって、水道管理設工事が開始され、急速高橋美久二技師の派遣を申請し、町水道

2. 位置と環境

部と発掘調査の実施に向けて協議を行った。その結果、とりあえず田辺町教育委員会が主体となって遺跡の確認調査を実施し、その調査結果に基づいて本調査の経費・期間等を策定することとなった。

なお、工事関係者・土地所有者をはじめ調査に参加された諸氏²⁾等多くの方々のご協力により、調査が無事すみやかに終了したことをここに記して感謝の気持ちとしたい。(西川英弘)

2. 位置と環境

田辺町は、南山城平野の中央を北流する木津川の、中流域の左岸に位置する面積43.61㎢、人口約40,000人を擁する町である。

町の西部は大阪府と境する低平な丘陵地帯(京阪奈丘陵)が広がり、東部は木津川の沖積作用によって形成された南北に長い平野部となっている。この西部丘陵地帯に源を発する諸河川は、東部の沖積平野を横切って木津川に流入するが、このうち、手原川・天津神川・馬坂川・防賀川・普賢寺川・蘆瀬川などの主要な河川は、平野部に流下するとともに天井川化しており、一種独特な景観を呈している。しかし、西部丘陵地帯、東部沖積平野ともに近年開発の波が押し寄せ、景観は刻一刻と変貌しつつある。

今回調査の対象となった興戸古墳群は、上記の西部丘陵地帯の東縁部、興戸集落の北西方、南西から北東方向に延びる丘陵の頂部及び緩部に所在する。その位置は、田辺中学校及び府立山城園芸研究所の裏山にあたり、標高80～90m、平野部との比高約50mを測る。古墳群の所在する丘陵上からの眺望は絶佳である。

以下、興戸古墳群をとりまく歴史的環境について、主として考古資料をもとに概観してみよう(第1図)。

南山城地方における旧石器時代の様相を物語る資料として、田辺町天王で採集されたササカイト製石核³⁾のほか、木津町岡田園神社遺跡出土のササカイト製彫器⁴⁾井手町上井手発見の有舌尖頭器⁵⁾宇治田原町発見の有舌尖頭器⁶⁾城陽市芝ヶ原遺跡出土の舟底形石器及びナイフ形石器⁷⁾八幡市美濃山採集のササカイト製国府型ナイフ形石器及び翼状刺針等⁸⁾の断片的資料を挙げることができる。これらの資料から、当地域の歴史の始源が今から約数万年前の後期旧石器時代にまで遡ることがわかる。

縄文時代の遺跡としては、石棒を出土した田辺町山崎遺跡⁹⁾(縄文後期)のほか、城陽市森山遺跡¹⁰⁾(縄文後期)、井手町鳥休遺跡¹¹⁾(縄文前・中期)、山城町涌出宮遺跡¹²⁾(縄文前期)などが知られている。このうち、昭和51年に発掘調査が実施された森山遺跡では、馬蹄形に配置された6基の円形住居が確認され、元住吉山Ⅱ式及び宮滝式を主体とする縄文土器に加えて打製石鏃・燧石などの石器類の出土を見、注目を集めた。しかし、森山遺跡を除いて遺跡としての実態が不明なものが多く、前代同様発掘調査を含めた資料の集積がまたれるところである。

続く弥生時代になると、遺跡数は急激に増加する傾向をみせる。弥生前期に遡る資料として、

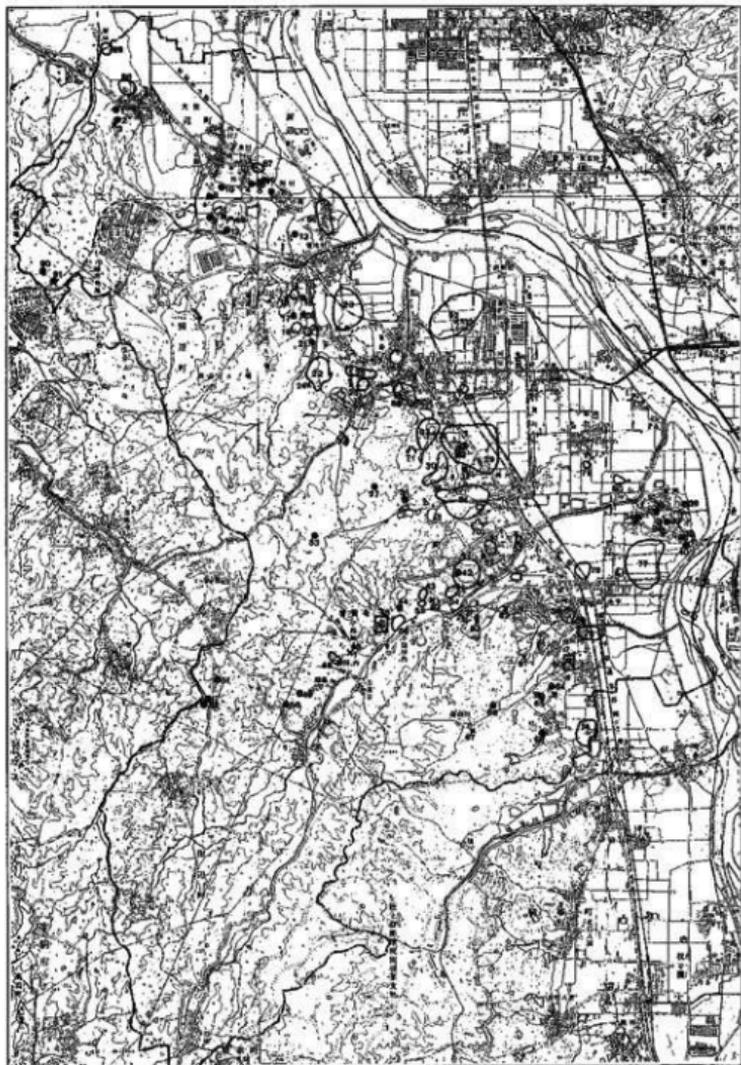
木津町燈籠寺遺跡¹³⁾土土の数点の土器片が知られている。断片的資料ではあるが、当地域への初期水稲耕作の伝播の問題を考える上で重要な意味をもつものといえる。中期になると、台地上又は丘陵上に地域拠点となるべき集落が各所に出現する。八幡市金右衛門垣内遺跡¹⁴⁾(Ⅱ～Ⅳ様式)、山城町涌出宮遺跡¹⁵⁾(Ⅱ～Ⅳ様式)などはその代表例であるが、今後の調査の進展によって現在性格不明の遺物散布地等が、その類例として追認される可能性は強い。後期には、前代の動向をふまえて平野部及び丘陵上の各所に集落が新たに形成される。前者の代表例として、八幡市木津川河床遺跡¹⁶⁾、城陽市塚本遺跡¹⁷⁾などがあり、後者の代表例としては、八幡市幣原遺跡¹⁸⁾、八幡市美濃山廃寺下層遺跡¹⁹⁾、田辺町天神山遺跡²⁰⁾、田辺町飯岡遺跡²¹⁾、城陽市芝ヶ原遺跡²²⁾、城陽市森山遺跡²³⁾などを挙げることができる。特に後者は、古墳出現前夜に於ける各地域集団間の緊張関係を背景として営まれた、所謂、高地性集落の範疇に含まれるもので、淀川水系の各所に点在する同種の遺跡とともに古墳発生の謎を解く一つの鍵となるものである²⁴⁾。ただ、この種の防衛的高地性集落と一般集落との識別については研究者の間でも論議を呼んでいるところであり、現在なお判然としない点は否めない。なお、単独出土の弥生時代遺物で、特に重要な意義を担うものを補足するならば、八幡市西部谷出土の突線銀Ⅲ式銅鐻²⁵⁾(後期)、八幡市金右衛門垣内遺跡²⁶⁾及び笠置町笠置山出土の銅剣形石剣²⁷⁾(中期)などを挙げることができよう。

古墳時代における当南山城地域は、畿内中心地域の一つとして、初期大和政権との密接な関係を背景として、いち早く首長層の確立をみる。そのありさまは、木津川右岸の平尾・椿井古墳群(山城町)、久津川古墳群(宇治市・城陽市)、および木津川左岸の飯岡古墳群(田辺町)、男山古墳群(田辺町・八幡市)の各古墳群に体现される。これらの首長基群は、古墳時代前期後半から中期にかけて継ぎ的に営まれたものが多いが、特に平尾・椿井古墳群の椿井大塚山古墳²⁸⁾は、山城最大の規模(全長約180m)を誇るとともに、わが国でも最古の古墳の一つとして著名である。

中期の古墳としては、久津川古墳群中低台地上に営まれた半川古墳群が、他を圧して偉容を誇っている。特にその盟主墳とみられる久津川車塚古墳²⁹⁾は、雄大な盾形周濠を掘り続らした典型的な畿内型古墳で、大王の棺といわれている長持形石棺を内部主体としている。おそらく、5世紀前半から中葉にかけて、初期大和政権との密接な政治的関係を背景として、当南山城地域の覇権を掌握した、栗隈氏の墳墓とみて大過ないであろう。

しかし、前・中期古墳の叙上の隆盛に対して、後期古墳の資料に極めて乏しいことは、既に多くの先学の指摘するところである。しかも久津川古墳群域の中核に位置する芝ヶ原遺跡・正道遺跡では、これまでの調査で数十基に及ぶ壙穴住居が確認されているにもかかわらず、顕著な後期群集墳の形成をみないことは注意を要する。これらの諸事象は、平川古墳群の没落、および6世紀以降にみられる埴原系氏族・大隅隼人等の移配と歴史的に深くかかわるものと考えられており、このことは、当田辺町における後期古墳の分布状況からも容易に傾ける。すなわち、数基から十数基を単位とする小規模な後期群集墳が、西部丘陵地帯の東縁部に点在しているが、この中でも特に松井地区及び普賢寺地区に形成された後期群集墳は、上記の想定を裏付ける好資料をもたらしている。前者は、現在9基開口している松井横穴群³⁰⁾を始め八幡市美濃山地区にかけて群在す

2. 位置と環境



第1圖 田辺町遺跡分布図

付表1 田辺町遺跡一覧表

番号	府	町	名	種類	番号	府	町	名	種類
4571		1	天神社古墳	円墳	4647~4650		48	王居谷古墳群	古墳
4572		2	松井横穴群	横穴	4651		49	御家古墳	円墳
4573		3	向山遺跡	散布地	4652		50	鑄古墳	円墳
4574		4	キンリンサン古墳	前方墳	4653		51	丸塚古墳	円墳
4575		5	南塚古墳	前方後円墳	4654~4655		52	しお古墳群	古墳
4576		6	大住車塚古墳	前方後方墳			53		散布地
4577		7	姫塚古墳	円墳			54	新宗谷遺跡	散布地
4578		8	月読神社古墳	円墳			55		散布地
4579		9	内山古墳	円墳			56	懸体天皇間城宮	散布地
4580		10	立居地蔵古墳	円墳	4656		57	伝説地	宮跡
4581		11	城山遺跡	散布地	4657~4659		58	山崎古墳群	古墳
4682		12	城山古墳	円墳	4660		59	山崎遺跡	古墳
4583		13	岡村古墳	前方後円墳	4661		60	三山木庵寺	寺院跡
4584~4588		14	郷土塚古墳群	古墳	4662		61	西羅遺跡	散布地
4589		15	大欠古墳	円墳	4663		62	南山遺跡	散布地
4590		16	小谷遺跡	散布地	4664		63	多々羅遺跡	散布地
4591		17	畑山古墳	円墳	4665		64	江津古墳	古墳
4592		18	畑山遺跡	窯跡か	4666		65	宮津古墳	古墳
4593~4596		19	西山古墳群	古墳	4667		66	葛蒲谷古墳	円墳
4597~4598		20	石ヶ谷古墳群	古墳	4668		67	奥山田池遺跡	散布地
4599		21	牛の宮古墳	円墳	4669		68	宮ノ口古墳	古墳
4600~4614		22	堀切古墳群	古墳・横穴	4670		69	大住城	城跡
4615		23	新遺跡	散布地	4671		70	興戸城	城跡
4616		24	西新遺跡	墳墓か	4672		71	田辺城	城跡
4617~4619		25	天理山古墳群	古墳	4673		72	普賢寺城	城跡
4620~4622		26	小欠古墳群	古墳	4674		73	水取城	城跡
4623		27	稲葉丹後谷古墳	古墳	4675		74		散布地
4625		28	興戸庵寺	寺院跡	4676		75	宮ノ下遺跡	散布地
4624		29	興戸遺跡	散布地	4677		76	山崎北方遺跡	散布地
4626		30	興戸古墳	円墳	4678		77	古屋敷遺跡	散布地
4627		31	酒釜古墳	円墳	4679		78		散布地
4628		32	郡塚古墳	古墳	4680		79		散布地
4629		33	大原古墳	円墳	4681		80		散布地
4630		34	飯岡塚古墳	前方後円墳	4682		81	興戸宮ノ前遺跡	散布地
4631		35	弥陀山古墳	円墳	4683		82		散布地
4632		36	ゴロゴロ山古墳	円墳	4684		83	河原遺跡	散布地
4633		37	薬師山古墳	円墳	4685		84	尼ヶ池遺跡	散布地
4634		38	金泥山古墳	円墳	4687		85	棚倉孫神社遺跡	散布地
4635		39	十塚古墳	円墳	4688		86	三野遺跡	散布地
4636		40	飯岡横穴	横穴	4689		87	東林遺跡	散布地
4637		41	天神山遺跡	集落跡	4690		88		散布地
4638		42	新宗谷古墳	古墳	4691		89		散布地
4639~4643		43	下司古墳群	古墳			90	交野ヶ原横穴	横穴
4644		44	大御堂古墳	円墳			91	松井古窯跡	窯跡
4645		45	普賢寺跡	寺院跡	4686		92	東新遺跡	集落跡
4646		46	御所内遺跡	古銭出土地			93	田辺遺跡	散布地
		47	都谷遺跡	居館跡					

●)京都府遺跡番号, ●●)山辺町遺跡番号

3. 調査経過

る、横穴の一大群集地域³¹⁾として知られており、文献上当地に蟠居していたことが明らかの大隅単人との関係が指摘されている³²⁾地域である。一方後者は、百済系氏族の居住地であったことが、文献・地名等によって確かめられている地域で、普賢寺川の左岸には下司古墳群³³⁾(5基)を始め十数基程度の横穴式石室墳の群集を認めることができる。また当該地は「日本書紀」仁徳天皇30年条及び継体天皇5年条にみえる山城簡城宮の伝承地として広く世に知られている。

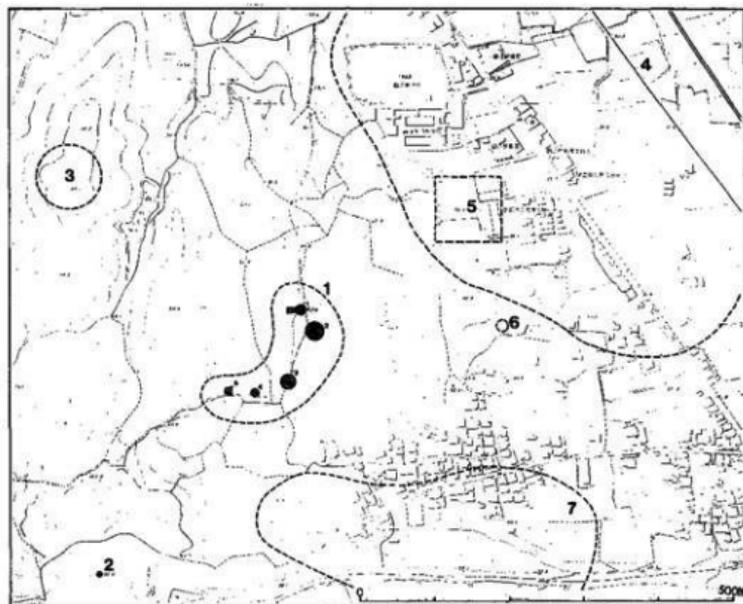
奈良時代、当地は南北に廊状に続く南山城平野の木津川左岸における交通上の拠点として重要な位置を占めるようになる。このことは、「始めて都亭の駅を置く。山背の国相楽郡には岡田の駅。綴喜郡には山本の駅。」とある「続日本紀」(和銅4年正月条)の記述からも容易に窺い知ることができる。山本駅の所在地は、三山木地区の山本集落の近傍に求められているが、考古学的な検証は未だなされていない。いずれにしろ、この山本駅は、山陰道の中継地点であると同時に、西は普賢寺谷を経て河内地方に通じ、東行すれば木津川を渡って北陸道と接続し、さらに宇治田原を経て近江地方に至る(田原道)陸路の要衝を扼する好適な立地条件を備えているといえよう。このような立地条件を反映してか、山本駅をとり囲むように、興戸廃寺・普賢寺・三山木廃寺の3ヶ寺が、奈良時代前期に創建されていることは、見のがせない事実である。

以上に略記した原始・古代遺跡の分布状況に比較して、中・近世の考古資料は極めて乏しい。このことは、遺跡の多寡にかかわる問題ではなく、明らかに調査・研究の立ち遅れを意味するものといえよう。その様な中において、古屋敷遺跡およびその西方の遺物散布地(第1図78)において実施された条里地割に伴う畦畔遺構の調査³⁴⁾や、都谷遺跡において実施された中世居館跡³⁵⁾の調査などは、田辺町内はもとより南山城地域における中・近世遺跡の本格的発掘調査の端緒をなすものとして高く評価されよう。(奥村清一郎)

3. 調査経過

興戸古墳群は、従来興戸古墳³⁶⁾・寿命寺古墳³⁷⁾と称されてきた古墳の他に「同一丘陵上に古墳数基あり」³⁸⁾と報告されているが、正確な基数・内容等については前記興戸古墳(2号墳)を除いて殆んど知られていない。そこで、今回調査を実施するに当たって、分布調査を実施したところ、5基の古墳又は古墳の可能性あるマウンドが確認された(第2図)。このうち、今回調査の対象となったのは、丘陵稜線上でも最も奥まった位置にある2基の古墳かと推定されるマウンドで、それぞれ4号墳・5号墳と仮称した。当初の工事計画によると4号墳の一部と5号墳の大半が切り土工事によって失われることになっていたため、急速発掘調査を実施することとなった。

調査を行うに当たって、とりあえず4・5号墳を中心とする周辺の地形測量に着手したところ、4号墳は径10m前後の円墳と推定されるが、既に墳丘の約半分強が竹藪の土取りによって失われていることが判明し、5号墳については、現況から墳形・規模等を推測し得ない複雑な地形を呈していることが明らかとなった(第3図)。



1.興戸古墳群 2.酒壺古墳 3.田辺城跡 4.興戸遺跡
5.興戸廃寺 6.郡塚古墳 7.興戸宮ノ前遺跡

第2図 興戸古墳群位置図

また、今回の調査対象地が、周知の遺跡として遺跡地図等に記載されていないこともあって、調査は当該地が遺跡地であるかどうかを確認することをも含めた試掘調査をまず実施し、その結果をまわって本調査の期間・経費等について改めて協議することとなった。

以上の経過を経て、5号墳の試掘調査に着手した。まず墳丘の規模・形態等を確認するため、墳頂部の2ヶ所に幅1mのL字状トレンチを、墳丘裾部の2ヶ所に幅1mの試掘トレンチをそれぞれ設定した。その結果、墳頂部に設定した試掘トレンチ内から土器片がまとめて検出されたため、直ちに本調査の実施に向けて関係各方面との協議を整え、引き続き全面的な発掘調査にとりかかることとなった。調査の結果は以下に記するとおりである。

一方4号墳の取り扱いについては、協議の結果、法面にかかる範囲を全面調査し、記録保存にとどめることで合意に達した。

調査は昭和55年10月6日に着手し、同11月8日に全ての調査工程を終了した。なお、昭和55年

4. 調査概要

11月8日、文化財保護委員会(委員長村井博)の現地視察が行われ、席上5号墳の全面保存に対する強い要望が出された。これを受けて京都府教育庁文化財保護課・田辺町教育委員会・田辺町水道部の3者で行われた協議の結果、当初の工事計画を変更して、5号墳の墳丘部分の全面保存が決定されたことは、文化財保護行政の今後に明るい材料を残すこととなった。(奥村清一郎)

4. 調査概要

(1) 4号墳

位置 東方へ派生する丘陵支脈の稜線上に位置している。調査着手前に現地踏査した段階では、雑木が繁茂している上、墳丘の半分以上が竹藪の土取りによって失われていたため、古墳か自然地形かの区別さえつかない状況であった。しかし、以下に記すとおり、地形測量及び発掘の結果、古墳であることはほぼ間違いないものと判断されるに至った。

墳丘 丘陵稜線上の高所を整形して営まれた、復原径約10m、高さ1.8mを測る一段築成の円墳と考えられる。墳頂部には復原径約4mの平坦面を設け、墳丘裾部には幅0.6m前後のテラスを繞らしている。墳丘は全て地山を整形して営まれたもので、盛土は全くみられず、埴輪・葦石等の外表施設も認められなかった。主体部は、土取りが行われた際に失われたものらしく、今回の調査範囲内には全くその痕跡をとどめていなかった。

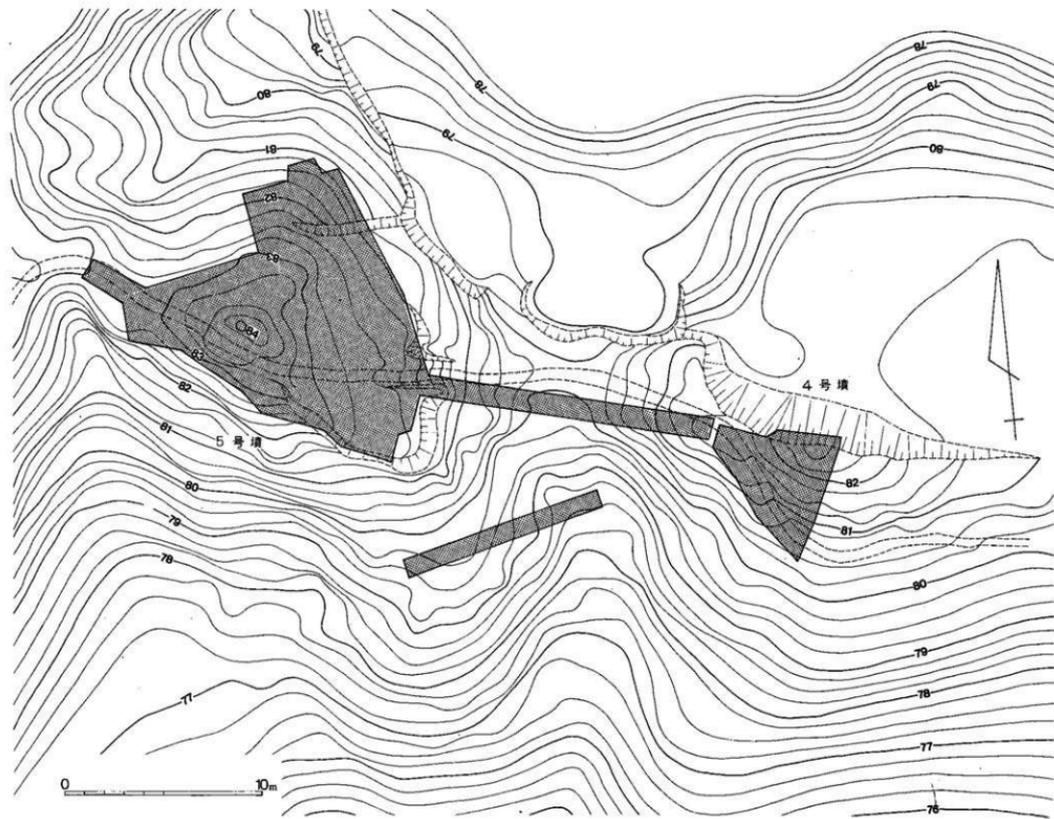
(2) 5号墳

位置 丘陵の尾根筋は、調査地付近では西から東へ向かって延びており、鞍部を境に4号墳と5号墳とが約30mの間隔を置いて東西に並んでいる。微視的にみると、両古墳とも稜線上のわずかな高まりを利用して営まれているが、特に5号墳は主に東へ傾斜する斜面に位置していることがわかる。

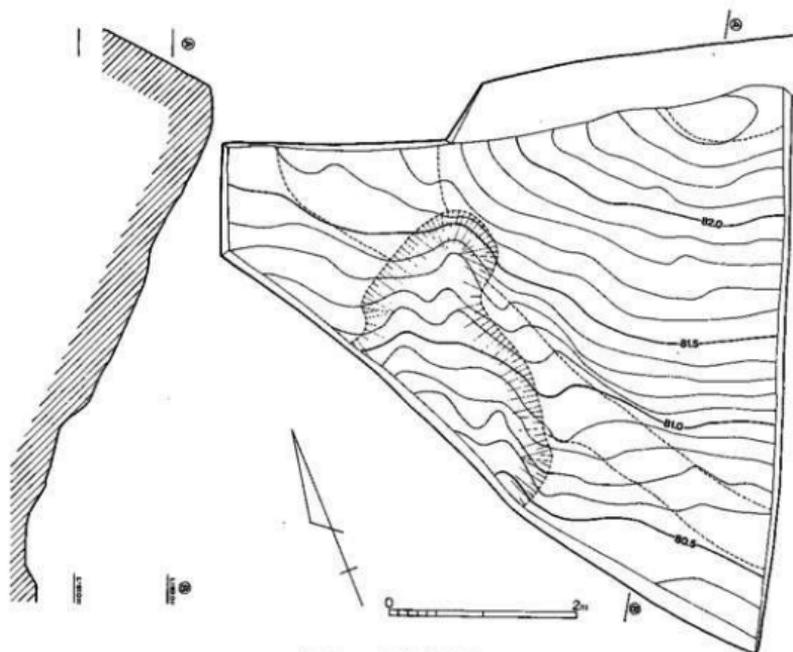
墳丘 墳丘は、四辺を方位と合致させた方墳とみることができる。特に東斜面では、南北方向に直線的に延びるコンターラインを多数認めることができるが、標高82mライン付近を境に傾斜の角度及び方向を違えており、この傾斜変換線が墳丘東辺の基底線であることを示している。また、墳丘の北側斜面のコンターラインも直線的傾向を示し、墳頂部から北西方向及び北東方向に延びる明瞭な稜線を認めることができる。墳丘の現存高は、丘陵の高位にあたる西側で約1m、低位にあたる東側で約1.7mを測る。

今回確認された墳丘は、大部分が地山を整形して形作られているが、東側斜面の一部で厚さ20cm前後を測る盛土層を確認した。さらに、墳頂部で厚さ約35cm、東辺の裾部で厚さ約80cmにわたって検出された流土層が、封土の流失によるものと考えられ、墳丘はもとはかなりの盛土を伴っていたものと推測される。その掃結として、主体部についてはその痕跡すら認められず、ただ性格不明の弥生土器片数個体分が東側斜面の流土中から遊離した状態で検出されたものと考えられる。

以上の調査結果により、墳丘は自然地形を最大限に利用し、かつ視覚的に大きく見せるた



第3图 調査地周辺地形図



第4図 4号墳実測図

めに、丘陵の高い側にあたる西辺を狭小にし、低い側にあたる東辺を大幅に拡張させた台形プランを早していることが明らかとなった。その規模は、西辺6m、東辺13.5m、南北両辺10.7mをそれぞれ推定復原することができる。墳丘の築造にあたっては、まず地山を方錐台形に整形した後、頂部及び斜面に相当量の盛土を行ったものと推定される。

出土遺物 墳丘の東側斜面から掘部にかけて堆積していた黄褐色または暗黄褐色土層(流土層)から、数個体分の弥生土器片が遊離した状態で検出された(第6図)。

壺には、外上方に開く口縁部の端部を下方に拡張させたもの(1・2)と、長頸壺又は直口壺の口縁部かと思われるもの(3)とがある。1は口径25.6cmを測る大型品で、しっかりした平底の底部(5)をもつ。口縁端部は下方へ拡張した後、粘度で補強して分厚く仕上げている。拡張された端面には、4条の凹線を繞らした後、3個を1単位とする円形浮文を6ヶ所に貼り繞らしている。外面は、ハケ調整の後ナデ、内面は、剥離が著しいため調整不明。暗茶褐色を呈する比較的堅緻な土器で、胎土中に多量の砂粒・角閃石を含んでおり、明らかに河内地方からの搬入品であることを示している。2は口径18.8cm、口縁端面はていねいに横ナデし、文様は施さない。内外面は、ハケ調整

5. まとめ

の後、ナデを施す。胎土に砂・褐色粒を含むやや軟質の土器で、色調は表面淡褐色、断面は炭素が遺存しているため黒色を呈している。3は口径15.8cmを測る口縁部片である。口縁端部を角張っておさめるもので、通例の長頸壺・直口壺より大型品になるものと推定される。

甕には、「く」の字状にゆるくくびれて立ち上がる口縁部をもつもの(4)と、平底の底部片(6・7)とがある。4は口径13.2cmを測る小型の甕で、6・7とは別個体である。内面は口縁部・体部ともに横方向のハケ調整を施すが、口縁部と体部とはハケ原体を連えているらしく、口縁部内面に施されたハケメは体部内面に施されたものより緻密である。外面は、ハケ調整の後、ナデを施す。

以上、図示し得た6個体のほか、壺体部片1個体以上、甕体部片1個体以上が認められる。これらの弥生土器は、畿内第V様式に属するもので、西ノ辻I式⁽³⁰⁾又はそれよりやや降る特徴をもつものと考えられる。

(奥村清一郎)

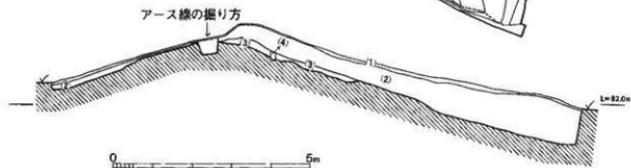
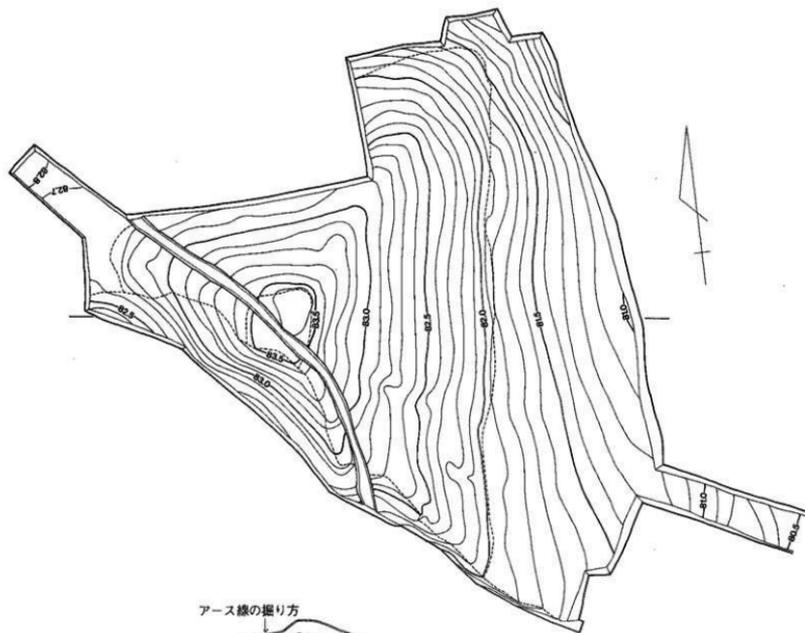
5. まとめ

今回実施された発掘調査及び分布調査の結果、興戸古墳群の内容・性格等に関して、いくつかの新しい事実を追認することができた。それらを略述すれば、以下のとおりである。

4号墳は、発掘調査の結果、地山を整形して営まれた復原径約10mの円墳であることが明らかとなった。しかし主体部・出土遺物等については何ら知るところがなく、古墳の所属年代等、今後に多くの検討課題を残すこととなった。

5号墳は、各辺を方位と合線させた方形墳で、墳丘東斜面の一部に認められた盛土層や、東辺の裾部一帯に厚く堆積していた流土層などの状況証拠から、墳丘は地山を方錐台形に整形した後、相当量の盛土を行ったものと推定される。さらに東辺の裾部付近から出土した弥生土器片を積極的に評価すれば、5号墳は、弥生時代後期前半頃に築造された方形台状墓とみることができ、主体部・出土遺物の性格等不確定要素も多く断定するに足る決め手を欠いている。しかしその蓋然性は極めて高いものと考えられる。同様の例として木津町吐師山遺跡Na11地点⁽⁴⁰⁾が知られているが、当南山城地域における方形台状墓の評価については、今後の調査の進展をまって改めて検討することとしたい。いずれにしても、5号墳から出土した「河内の土器」は、当地域における当該期の搬入土器の初見例として注目される。その背景として、5号墳に関係する地域集団と河内地方の地域集団との間に、何らかの政治的血縁的関係を想定することは、当遺跡の立地条件からみても妥当な解釈といえよう。

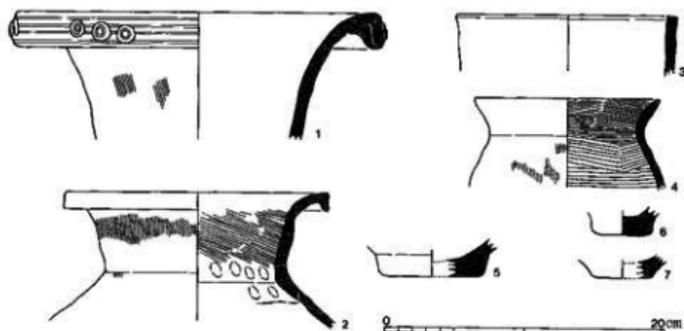
なお、今回の調査ならびに過去の調査及び分布調査によって明らかとなった興戸古墳群(1～5号墳)の内容をまとめたものが付表2である。これによっても明らかなように、興戸古墳群のもつ特徴として、①古墳時代前期を中心とする古墳群であるが、群中に弥生時代後期の方形台状墓(5号墳)を含む可能性があること、②円墳(2号墳)を主墳とし、小規模な前方後円墳(1号墳)を群中にもつこと、③2号墳は円墳であるが、埴輪・葦石を伴い内部主体の粘土槨に内行花文鏡・石製腕飾類(鍬形石・石剣・車輪石)を副葬する、典型的な畿内前期型古墳(前II期)の条件を完備



- ①腐植土 ②黄褐色又は暗黄褐色土(填充土)
 ③茶褐色土(填充土) ④暗茶褐色土(木根の腐跡)

第5図 5号墳実測図

1. 奥戸古墳群発掘調査概報



第6図 5号墳出土土器実測図

していること等々の極めて興味深い事実を指摘することができる。この様に今回実施された調査の結果、新たに提起された問題点は多々あるが、今回は問題の指摘にとどめ、後日資料の集積をまっけて改めて検討を加えてみたい。(奥村清一郎)

付表2 奥戸古墳群一覧表

名称	墳形	立地	古墳の概要
1号墳	前方後円	丘陵頂	全長24m、後円部径15.6m、後円部高1.5m、前方部幅7m。幅約3.5mの周濠を伴う。後円部は高圧線の鉄塔によって一部削平されている。前方部は狭小かつ低平である。
2号墳	円	丘陵頂	径28m、高2.2m、周濠・埴輪・葺石を伴う。粘土器を内部主体とし、内行花文鏡2、管玉、鏡形石、車輪石、石剣、剣などを出土。
3号墳	円?	丘陵稜	稜線上の高まり。古墳か。
4号墳	円	丘陵稜	径10m、高1.8m。円墳の残欠。
5号墳	方	丘陵稜	西辺6m、東辺13.5m、南北両辺10.7m、高1.7m。弥生土器(V)出土。

注

- 1) 京都府教育委員会編『京都府遺跡地図』昭和47年。財調査報告書」1(田辺町教育委員会、昭和55年)。
- 2) 小林豊彦、南旨光、森本恭有、羽田雅道、吉山三子生、河村浩之(調査補助員)、星正男、二宮亨(作業員)。
- 3) 同志社校地学術調査委員会編『田辺町埋蔵文化財調査報告書』1(田辺町教育委員会、昭和55年)。
- 4) 奥村清一郎・伊野近富『岡田園神社遺跡発掘調査概報』(『木津町埋蔵文化財調査報告書』3、木津町教育委員会、昭和55年)。

- 5) 梅原末治「井手発見ノ石器ト両大塚古墳」(「京都府史蹟勝地調査会報告」4, 京都府, 大正12年)。
- 6) 山田良三「芝ヶ原遺跡発掘調査報告書」(芝ヶ原遺跡調査会, 昭和55年)。
- 7) 6)に同じ。
- 8) 3)に同じ。
- 9) 梅原末治「三山木村山崎ノ石椁ト同地ノ古墳」(「京都府史蹟勝地調査会報告」4, 京都府, 大正12年)。
- 10) 近藤義行「森山遺跡発掘調査概報」(「城陽市埋蔵文化財調査報告書」6, 城陽市教育委員会, 昭和52年)。
- 11) 奈良大学考古学研究会「井手町埋蔵文化財分布調査報告」(昭和49年)。
- 12) 高橋美久二・林和広「涌出宮遺跡発掘調査概要」(「埋蔵文化財発掘調査概報」1969, 京都府教育委員会, 昭和44年)。
- 13) 石井清司「位置と環境」(「木津町埋蔵文化財調査報告書」1, 木津町教育委員会, 昭和52年)。
- 14) 立命館大学人文地理学研究会「生駒山脈—その地理と歴史をかたる」(昭和19年)。
- 15) 12)に同じ。
- 16) 山田良三・石部正志「山城八軒屋谷土師遺跡調査報告」(「古代学研究」34, 昭和38年)。
- 17) 10)に同じ。
- 18) 堤圭三郎・高橋美久二「八幡丘陵地所在遺跡発掘調査概要」(「埋蔵文化財発掘調査概報」1969, 京都府教育委員会, 昭和44年)。
- 19) 江谷寛「美濃山廃寺跡発掘調査報告」(八幡町教育委員会, 昭和52年)。
- 20) 山田良三「三山木弥生式遺跡」(田辺町教育委員会・田辺町文化財保護委員会, 昭和43年)。
森浩一編「田辺天神山弥生遺跡」(「同志社大学文学部考古学調査記録」5, 同志社大学文学部文化学考古学研究室, 昭和51年)。
- 21) 20)に同じ。
- 22) 奥村清一郎「久世廃寺発掘調査概報」(「城陽市埋蔵文化財調査報告書」4, 城陽市教育委員会, 昭和51年)。
- 23) 10)に同じ。
- 24) 都出比呂志「古墳出現前後の集団関係」(「考古学研究」20—4, 昭和49年)。
- 25) 宇佐晋一「京都府八幡町出土の銅鐻」(「古代文化」9—3, 昭和37年)。
- 26) 14)に同じ。
- 27) 高橋美久二「相楽・綴喜両郡内第二次遺跡分布調査概要」(「埋蔵文化財発掘調査概報」1971 京都府教育委員会, 昭和46年)。
- 28) 樋口隆康「山城国相楽郡椿井大塚山古墳調査略報」(「史林」36—3, 昭和28年)。
- 29) 梅原末治「久津川古墳研究」大正9年。
近藤義行・笠井敏光「久津川古墳群発掘調査概報」(「城陽市埋蔵文化財調査報告書」5, 城陽市教育委員会, 昭和52年)。
- 30) 田辺郷土史会編「田辺町郷土史—古代篇」昭和34年。
- 31) 近年, 当地域の横穴を地下式横穴とみる見解が提示されているが(江谷寛「南山城発見の地下式古墳」(「古代学研究」90, 江谷寛「美濃山廃寺跡発掘調査報告」), 少なくとも荒坂横穴群内に存在するものは, 傾斜方向・遺跡の現状等からみて, 横穴の開口部が埋没し, 玄室の奥壁付近の天井が陥没したものとみるべきであろう。
- 32) 西田直二郎「洛南大住村史」昭和26年。
森浩一「近畿地方の単人」(「日本古代文化の探求単人」社会思想社, 昭和50年)。
平良泰久「南山城の後期古墳と氏族」(「京都考古」14, 京都考古刊行会, 昭和50年)。
- 33) 堤圭三郎「普賢寺所在古墳発掘調査概要」(「埋蔵文化財発掘調査概報」1967, 京都府教育委員会,

1. 興戸古墳群発掘調査概報

- 昭和39年)。
34) 3)に同じ。
35) 鈴木成治・松藤和人編『京都府田辺町都谷中世館跡』(同志社大学校地学術調査委員会, 昭和52年)。
36) 梅原未治『田辺町興戸古墳』(『京都府文化財調査報告』21, 京都府教育委員会, 昭和30年)。
37) 30)に同じ。
38) 1)に同じ。
39) 小林行雄『大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡Ⅰ地点の土器』(『弥生式土器集成』資料編, 昭和43年)。
40) 辻本和美『吐師山丘陵遺跡試掘調査概報』(『木津町埋蔵文化財調査報告』3, 木津町教育委員会, 昭和55年)。

2. 興戸宮ノ前遺跡発掘調査概報

2. 興戸宮ノ前遺跡発掘調査概報

例 言

1. 本概報は、田辺町教育委員会が三和住宅株式会社の委託を受けて実施した、田辺町大字興戸小字宮ノ前・御垣内所在の興戸宮ノ前遺跡の発掘調査の概要報告書である。
2. 調査の期間は、昭和55年10月23日から昭和55年11月27日までである。
3. 調査の組織は下記のとおりである。

調査主体者	田辺町教育委員会教育長	藪下撤一
調査担当者	京都府教育庁指導部文化財保護課技師	奥村清一郎
	田辺町教育委員会社会教育課社会教育主事	西川英弘
調査事務局	田辺町教育委員会社会教育課(課長 博田武則)	
調査委託者	三和住宅株式会社	
4. 調査後の遺物整理・図面整理・整図は、主に森本恭有・羽田雅道・南旨光・小林豊彦が行った。
5. 花粉分析は、大阪府立芥川高等学校地学講師伊辻忠司氏に依頼した。
6. 本概報は、調査担当者が分担執筆し、文責は文末に示した。

1. はじめに

昭和55年8月、奈良市所在の三和住宅株式会社より田辺町教育委員会に対し、同社が宅地開発を予定している地域内を対象とする埋蔵文化財の調査依頼があった。その開発予定地は、田辺町大字興戸小字宮ノ前・御垣内に位置しており、『京都府遺跡地図』¹⁾によると、この付近は土師器の散布地になっていることが判明した。このため、当委員会では直ちに府教委文化財保護課と連絡をとり、その取り扱いについての指導を求めた。

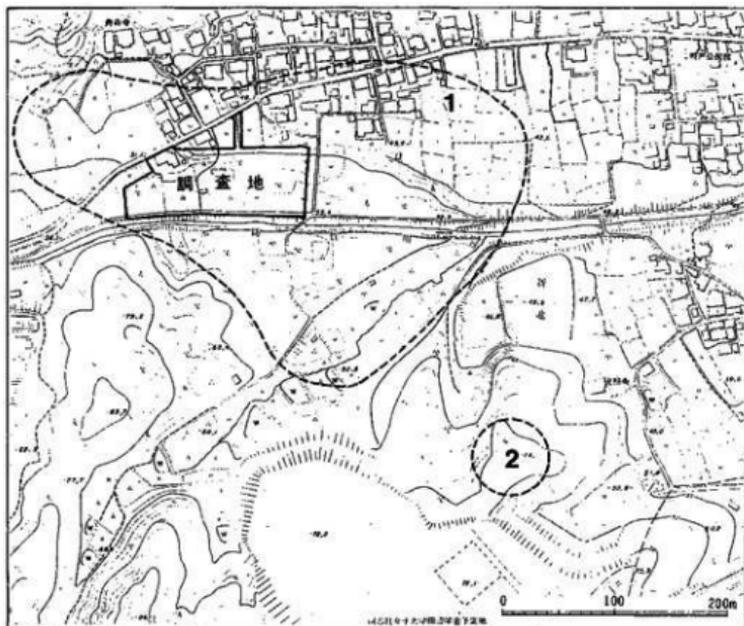
その結果、田辺町教育委員会が主体となって遺跡の性格を把握するための試掘調査を実施し、その結果をみて本調査を計画・実施することとなった。

調査を行うにあたって、付近に所在する興戸遺跡・興戸庵寺等との混同を避けるため、遺跡名称は付近の小字名を付して興戸宮ノ前遺跡と呼称することにした。(西川英弘)

2. 調査経過

今回の調査地は、天井川の典型例である防賀川の北岸に展開する最大幅約70m、長さ約350mを測る台地上の一画を占めている。この台地は、北側の平地との北高約4m前後を保ちながら防

2. 調査経過



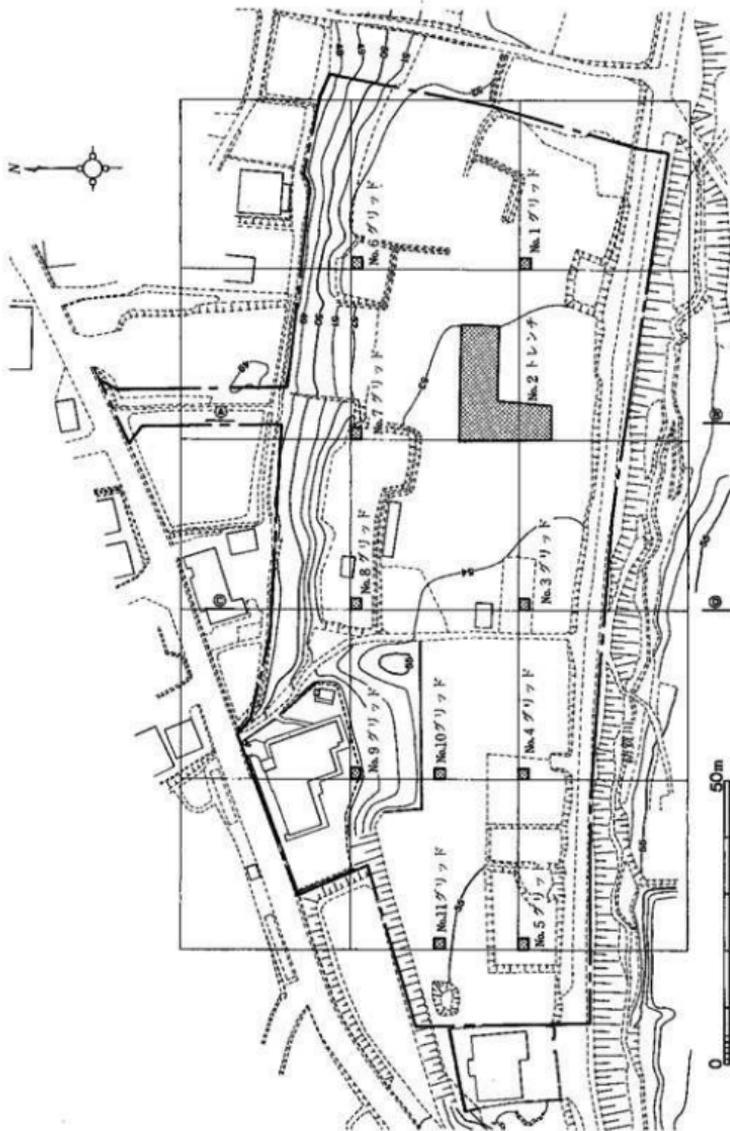
1.興戸宮ノ前遺跡 2.興戸城跡
第7図 興戸宮ノ前遺跡位置図

賀川に沿って東西に延びている。

調査に先立って現地を踏査したところ、防賀川の運搬作用によってもたらされたものと推定される砂層が広範囲にみられ、遺構の遺存状況についてもやや疑問がもたれた。このため、調査は、グリッド調査を主体とする試掘を先行し、遺構・遺物の検出状況に応じてグリッドの拡張をはかると言う調査方法をとることとした。

試掘調査を実施するため、先ず調査対象地をほぼカバーする30m方眼の地区割りをを行い、これに基づいて以後の調査を進めて行くこととした。この地区割りは、方位を真北方向にとる任意の方眼で、東西5区(150m)、南北3区(90m)を仮りに設定し、その北西隅又は西辺の中央部に2m角の試掘グリッドを計11ヶ所設定した(第8図)。このうち、No9グリッドのみ台地から一段下がった平地部分を占めているが、その他のグリッドは全て台地上に位置している。

No9グリッドは、廃屋となっている人家の裏庭に設定したもので、表土層の直下で黄色砂質土(固くしまっている)の地山に達したが、湧水が著しく即日埋め戻した。

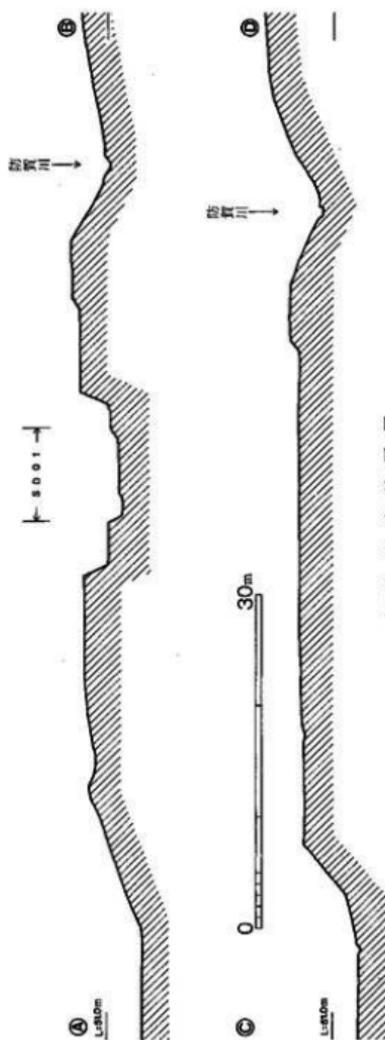


第8圖 周辺地形図

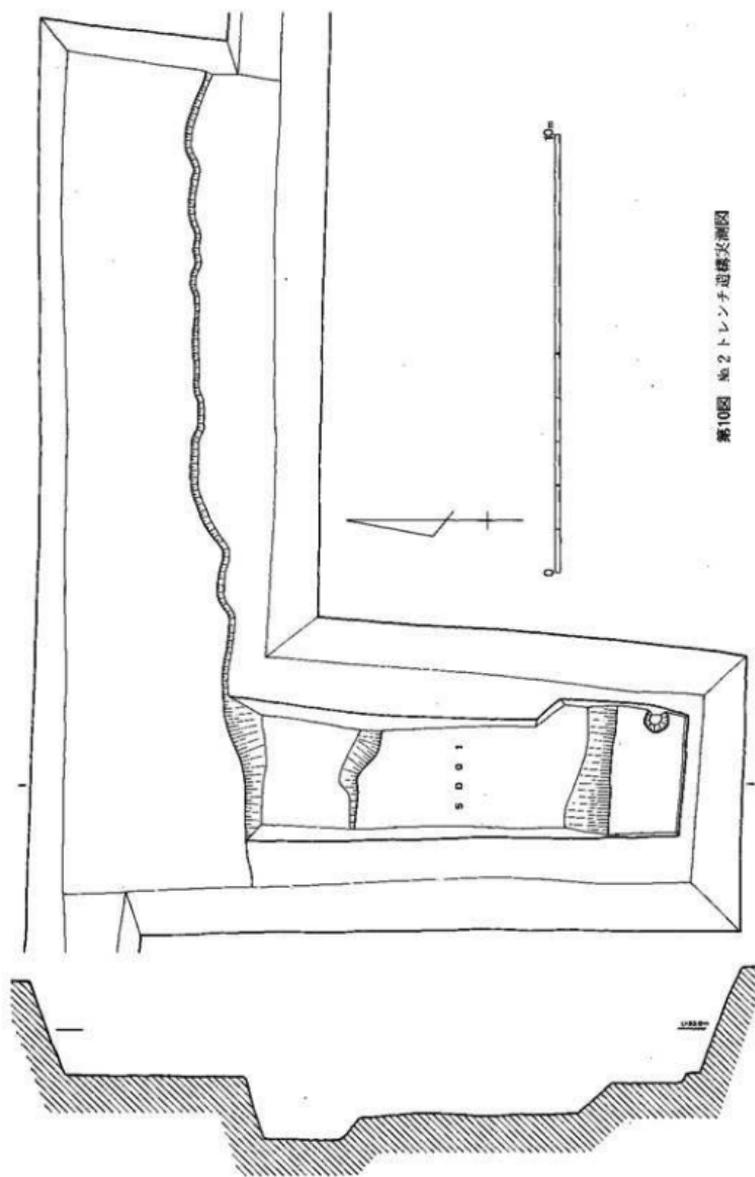
2. 調査経過

一方台地上に設定したNo 1～No 8・No 10・No 11の各グリッドは、いずれも現地表下1.3 m前後の深さまで掘り下げたが、良好な包含層および明確な遺構は検出できなかった。各グリッドに共通してみられる基本的な層序は、第1層が暗褐色砂質土(表土層)、第2層が黄白色砂・黄色砂質土・黄色砂等の縞状の水平堆積となっているが、狭小なグリッドであるため、第2層の層厚はいずれのグリッドにおいても確認できなかった。なお第1層には極く少量の近世遺物を含むが第2層からは1片の土器片も検出されなかった。そこで、第2層の堆積年代・性格及び下層の状況を調査するため、No 2グリッドを5 m四方に拡張し、階段状に掘り下げたこととした。はたして、現地表下約2.5 mの深さまで掘り下げたところで第2層の下面に達し、さらに掘り進むとかなり水分を含んだ暗褐色土・暗茶褐色土に達し、同層から土師器・陶器等の中世土器を多数検出した。

以上に略記した試掘調査の結果をふまえて、No 2グリッドの第2層下面で検出された中世遺物包含層の性格を確認するため、7区から2区にわたるL字状トレンチ(No 2トレンチ)を設定し、第1・第2層を重機で掘削した。その後の調査の結果、上記の中世遺物包含層は東西方向に延びる旧河道の埋土



第9図 埋跡断面図



第10図 Ⅱ-2 トレンチノ遺構平面図

4. 出土遺物

であることが判明し、その南岸一帯に中世遺跡の存在を推測するに足る資料を得ることができた。

(奥村清一郎)

3. 検出遺構

前項でも記したとおり、遺構としてはNo 2 トレンチで検出された旧河道SD01及びその南岸で検出された性格不明のピットがある(第10図)。

旧河道SD01は、現地表下約2.5 mの深さで上面の輪郭が検出された流れを東西方向にとる旧河道である。上肩での川幅9.5 m、深さ約1.2 mを測る。検出された南北兩岸の輪郭のうち、北岸は長さ約18 m、南岸は長さ約4 mにわたって検出されたもので、このうち西端部付近の二ヶ所を完掘した。基盤層は、南壁及び川底面の大半が茶褐色粘土層(地山)、川底面の北端付近が青灰色粘土層、北壁が黄白色砂礫層となっており、青灰色粘土層ならびに黄白色砂礫層はSD01よりさほど遅らない或る時期の堆積層である。埋土は、下層から茶褐色混雑土層、暗灰色混雑シルト層(有機物含む)、暗灰褐色シルト層、暗褐色土層、暗灰色シルト層、黄褐色シルト質土層の順に堆積しており、各層には若干の中世遺物を含むが、特に最下層の茶褐色混雑土層から比較的まとまった土器片を得ることができた(第11図)。

なお、SD01の南岸から地山を掘り込んだピットが1ヶ所検出された。発掘面積が狭小であり、かつ伴出遺物を欠くため、年代・性格等は不明であるが、SD01の埋土に含まれていた遺物に関係する遺構となる可能性も考えられる。

(奥村清一郎)

4. 出土遺物(第12図)

今回の調査で検出・表採された遺物には、弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・中世陶器・染付磁器などがある。多くはSD01埋土内から出土したものであるが、ここではSD01下層・SD01上層・その他の3者に大別してその概略を報告する。²⁾

SD01下層出土の土器(1～19)

SD01の埋土のうち最下層にあたる茶褐色混雑土層から出土したもので、土師器皿・瓦器・中世陶器がある。

土師器皿(1～15)には、口径9.9 cm～11.7 cmを測る大皿(1～6)と、口径6.7 cm～9.0 cmを測る小皿(7～11・13～15)とがある。大皿は、口縁部が外反気味に大きく立ち上がる深手のもの(1～3)と、全体に丸味を帯びた浅手のもの(4～6)の2者に細分できる。小皿は平底か又はやや丸味を帯びた底部と、わずかに屈曲して立ち上がる口縁部とをもつ浅手の皿で、器高が1 cmにも満たないものもある。器壁の調整は、口縁部外面及び内面は横ナデ、底部外面は不調整、胎土には少量の砂粒・褐色粒・金雲母を含み、淡褐色系の色調を呈するものが多い。なお、12は一皿目として図示したが、他に例をみない厚手の土器で器形・用途等については再検討を要する。

瓦器(17~19)には、鍋と椀とがある。
 鍋(17)は口径28.0cm, 器高12.9cm(推定),
 逆「く」の字状に鋭く屈曲して立ち上がる
 口縁部をもつもので、外面全体に分厚く
 煤が付着している。椀(18・19)は口径9.9
 cm~10.1cm, 口縁端部内面に段をもつも
 ので、体部内面には粗い平行暗文を施す。

中世陶器には、丹波系かと思われる壺
 口縁部の小片(壺とこれとは別個体のもの
 とと思われる体部片若干とがある。

SD01上層出土の土器(20~27)

SD01埋土のうち、主に暗灰褐色シルト
 層から出土したもので、弥生土器・須恵
 器・土師器皿・瓦器・中世陶器がある。

弥生土器には、しっかりした平底の底
 部片(壺)がある。

須恵器には、古墳時代の杯身(壺)のほか、
 平安時代に所属する短頸壺が出土してい
 る。

土師器皿には、大(20・21)小(22・23)
 2種あるが、型的にはSD01下層出土の
 ものと差異はない。

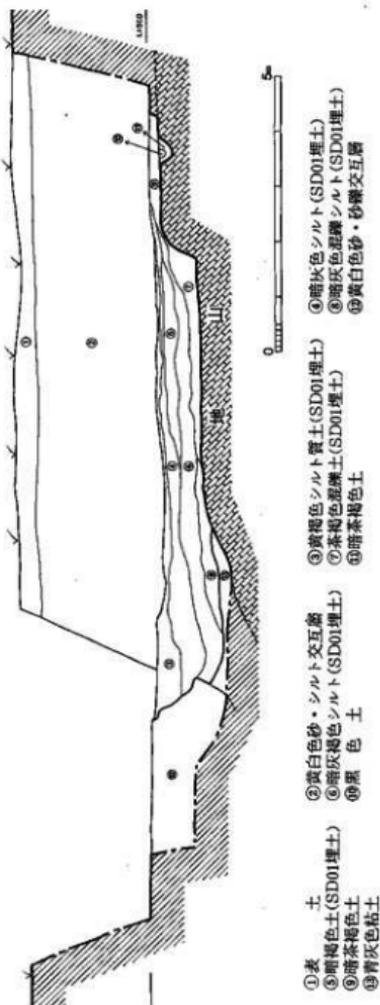
瓦器には、高台の断片(壺)がある。

中世陶器には、常滑系又は信楽系のも
 のと思われる壺口縁部片(壺)1個体分のほ
 か、別個体のものと考えられる体部片が
 ある。

その他の土器(28~34)

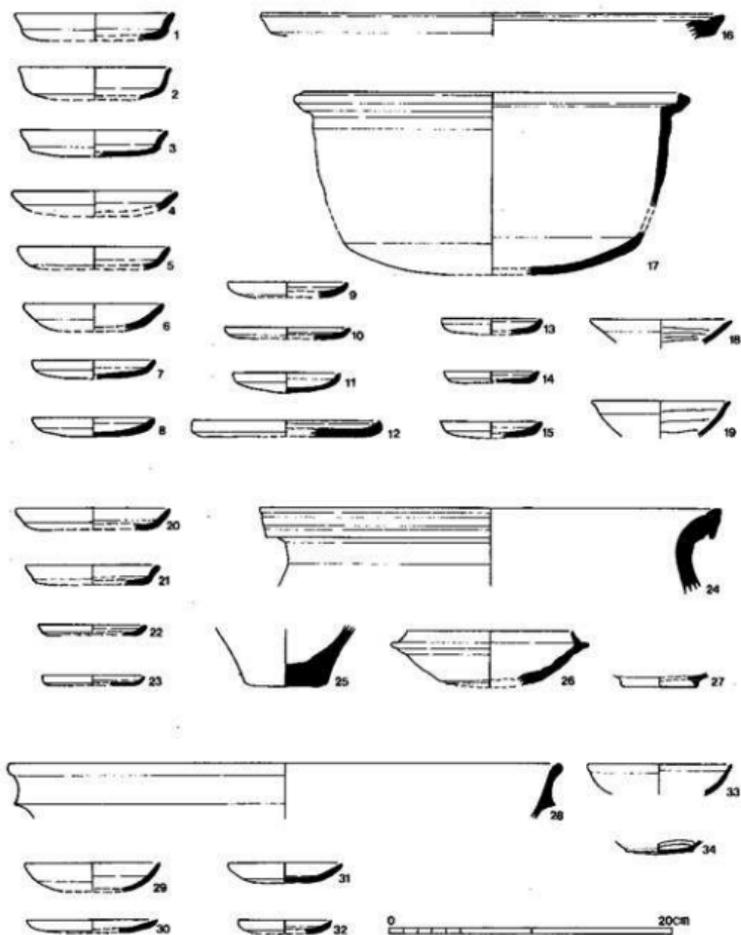
土師器(28~32)と瓦器(33・34)とが
 あり、出土地点・層位はNo.2トレンチ第2
 層(Ⅲ), No.6グリッド第1層(Ⅳ)のほか、No.
 2トレンチの排土から表探した層位不明
 のもの(28・29・32・33・34)がある。

土師器には、焙烙鍋の一種と考えられ
 るもの(壺)と皿(29~32)とがあり、このう



第11図 旧河道SD01横断断面図

4. 出土遺物



第12圖 出土七器実測圖

ち、29は通例の土師皿とは異なり、灰白色系の色調を呈する所謂白土器と呼ばれるものである。瓦器には、碗の体部片④と底部片④がある。(奥村清一郎)

5. ま と め

今回の調査成果を要約すれば、①防賀川流路の変遷を確認できたこと、②天井川の形成年代を追究する上での好資料を得たこと、③防賀川の南岸に中世遺跡が存在する可能性が認められたこと、の3点を挙げることができよう。

①に関して付言すれば、主要な検出遺構である旧河道SD01は、防賀川の北約30mの位置で検出された旧流路で、明らかに防賀川の旧河道と考えられるものである。河底面のレベルは、現河道のそれよりも約1m低い。今回の調査結果および周辺の地形等から判断して、防賀川の流路はSD01から現河道へ移行し、その後はさほど流路を変えることなく現在に至ったものと思われる。かかる流路の固定化に伴って、上流からもたされた土砂は、たびたび浚渫され、それに起因して調査地付近では北岸には最大幅約70mの台地が形成され、それより下流では天井川と化して行ったものと推察される。

②については、既に谷岡武雄氏が南山城の天井川に関する詳細な研究を成している。すなわち山城町不動川の河床上昇の時期にふれて、「18世紀後半と推定される。(中略)18世紀後半における河床上昇にもかかわらず、明治初期には一部を除き、いまだ天井川は発達せず、対岸の人家の屋根を見通すことさえ可能であったといわれる。今日のごとき大天井川は、明治中期以後において急速に発達した」と³⁾。

その後天井川に関する本格的な調査・研究は行われないうまま現在に至っているが、はからずも今回の調査によって防賀川が天井川化した年代の一端を窺い知ることができた。すなわち、旧河道SD01の埋積年代は、埋土下層から出土した土器からみて、15世紀代にその上限を求めて大過ないものと考えられる。その後の流路の南方への移動・固定化に伴う土砂の浚渫によって、層厚2mを越える第2層の堆積をみたのであろう。しかし、第2層の堆積年代については、遺物を殆んど含まないため決定し難いが、16~17世紀頃には第2層の堆積とこれに伴う下流での天井川化はかなり進行していたものと推察される。いずれにしろ、南山城地域にみられる天井川は、森林の乱伐等を背景に、近世以降急速に発達した、「人」の川であると説く、谷岡氏の見解を裏付ける一つの傍証を得たことは貴重な成果といえよう。

③は、SD01出土遺物とSD01の南岸で検出されたビットに基づくものであり、今後多くの調査課題を残している。ただし、上記のとおりSD01出土の土器は、旧河道に伴うものとはいえ、15世紀代に所属するものを主体とし、かつそれらは殆んど器表面の摩滅が認められないため、調査地の極く近辺に当該時期を中心とする遺構が存在することは、まず間違いないものといえよう。

(奥村清一郎)

注

- 1) 京都府教育委員会「京都府遺跡地図」(昭和47年)。
- 2) 遺物の検討にあたっては、鈴木重治氏の御教示を得た。
- 3) 谷岡武雄「平野の開発」(昭和39年)。

付. 興戸宮ノ前遺跡の堆積物の花粉分析結果

伊 辻 忠 司

1. は じ め に

本報告は、1981年11月に興戸宮ノ前遺跡の防賀川の旧河道から採集された堆積物についておこなった花粉分析の結果である。この調査の目的は、防賀川埋没当時(推定：室町時代)の自然環境を推定することにある。

今回の分析に供した試料は、下記のとおりである。

- 1) 現世の耕作土。(第11図①)
- 2) 暗灰褐色シルト層の南部、S区(有機質・室町時代の土器を含む)。(第11図②)
- 3) 暗灰褐色シルト層の北部、N区(多量の有機質・室町時代の土器を含む)。(第11図③)
- 4) 防賀川川底の青灰色粘土層(室町時代以前の堆積物)。(第11図④)

2. 花粉分析の方法

試料は、次の過程で処理し標本を作製した。

- 1) 試料約200gをビーカーに入れ、ピロリン酸ナトリウムの飽和溶液を十分に加え、一昼夜放置して泥化させる。
- 2) 泥化した試料に水を加え攪拌し、茶こしを通して泥液を沈澱槽に移す。
- 3) 傾斜沈澱法により、上液の濁りが約3時間でなくなるまで水の交換を繰り返す。
- 4) 塩化亜鉛の飽和溶液を加え、毎分800回転で45分間遠心分離し、浮いた花粉を集める。
- 5) 塩酸と硝酸の混合液を加えて蒸煎し植物組織片を除去する。
- 6) アセトリシス処理をおこなう。
- 7) 集めた花粉をグリセリンゼリーで封入し、カバーガラスをマニキュア液で密封する。

検鏡は、倍率400倍でおこない、識別可能な花粉についてすべて同定した。

3. 花粉分析の結果および考察

本調査では、4試料を分析しすべての試料で花粉が検出された。分析結果は、検出された花粉をTAXONごとに樹木種・草本種に分けて集計し、それぞれの比率を検出実数と百分率で表示した(付表3)。

付表3より、室町時代以前(防賀川川底の試料)の堆積物では、現在の植生環境と比べ変化が認められる。それは、ハンノキ属・大型イネ科(栽培種を含む)・小型イネ科(水田雑草)等が比較的高い出現率を示したことである。ハンノキ属は、水が地表に停滞するような湿地を好み、過湿の

付、興戸宮ノ前遺跡の堆積物の花粉分析結果

土壌に先駆的に出現する樹木である。また、ハンノキの生育条件を充たすような地は古くから水田に利用されることが多かった。したがって、室町時代以前の遺跡周辺は、ハンノキ属・ヤナギ属・モチノキ属等の樹木、ヨモギ属・セリ科・カヤツリグサ科・アリノトウグサ科・ギシギシ属・ガマ属等の草木が生育する過湿の地であり、それを取り囲む丘陵部に、マツ属を優勢種とし、その他、コナラ亜属・アカガシ亜属・スギ属・サクラ属等が含まれる雑木林を形成していたものと推定される。また、栽培種と思われる大型イネ科も多くみられることより、過湿土壌が水田として利用された可能性は強い。

室町時代ころ(S区・N区の試料)の堆積物は、これまで高い出現率を示していたハンノキ属・マツ属が急減し、コナラ亜属・アカガシ亜属及び大型イネ科・ソバの増加が認められる。これは、ハンノキ・マツを燃料として利用するための伐採が進行し、変わってコナラ亜属・アカガシ亜属等を優勢種とする雑木林が形成されたものと思われる。また、栽培種であるソバの増加は、水田に適さない丘陵部にも人為的な開発が進行したものと推定される。

室町時代から現在までの継続した試料が得られなかったので詳細な考察はさけたいが、現在、遺跡周辺の丘陵部は、アカマツを中心とする雑木林である。これは、室町時代以降、コナラ亜属・アカガシ亜属等までもが燃料及び、それらの落葉や雑木林の下草等が堆肥として利用されたため、丘陵部が荒地地化し、やせて乾燥しやすい土壌となり、二次林としてアカマツ林が優勢になったものと思われる。

4. ま と め

1. 遺跡周辺の環境は、室町時代以前ハンノキが生育できるような、過湿土壌が存在した。
2. 遺跡周辺の丘陵部は、室町時代以前アカマツを中心とする雑木林であったが、時代の推移とともに、コナラ亜属・アカガシ亜属等を優勢とする雑木林を経て、現在のアカマツを優勢とする雑木林へと遷移してきたと思われる。
3. 遺跡周辺では、室町時代以前からイネの栽培がおこなわれていたと考える。
4. 室町時代には、イネとともにソバを栽培した可能性が強いと思われる。

参考文献

- 沼田真(1975)：図説日本の植生，朝倉書店。
大井次三郎(1978)：日本植物誌，至文堂。

付表3 興戸宮ノ前遺跡の堆積物の花粉分析結果

No.1 樹木種(AP)

(○付数字は顕1区による)

TAXON	層 準 数値処理	①現世の耕作土			②SD01埋土の南灰 褐色シルト層の南部 (室町時代), S区			③SD01埋土の南灰 褐色シルト層の北部 (室町時代), NE区			④SD01底面の青灰 色粘土層 (室町時代以前)		
		検出 実数	樹木% 全体%	全体%	検出 実数	樹木% 全体%	全体%	検出 実数	樹木% 全体%	全体%	検出 実数	樹木% 全体%	全体%
Ginkgo (イチョウ属)								1	0.1	0.1			
Podocarpus (マキ属)		3	0.5	0.4	1	0.3	0.3						
Abies (モミ属)		2	0.3	0.2	5	1.5	1.3	5	0.4	0.4			
Tsuga (ツガ属)		1	0.2	0.1	2	0.6	0.5	11	0.9	0.8	3	0.5	0.4
Picea (トウヒ属)											3	0.5	0.4
Pinus Diploxylon (二葉マツ属)		524	85.2	63.8	67	20.5	17.0	118	9.6	8.6	313	55.6	44.5
Pinus Haploxyton (五葉マツ属)		2	0.3	0.2							4	0.7	0.6
Sciadopitys (コウヤマキ属)		1	0.2	0.1	3	0.9	0.8	26	2.1	1.9	3	0.5	0.4
Cryptomeria J (スギ属)		10	1.6	1.2				2	0.2	0.1	11	2.0	1.6
Chamaecyparis (ヒノキ属)		3	0.5	0.4	16	4.9	4.1	8	0.6	0.6	2	0.4	0.3
Salix (ヤナギ属)					19	5.8	4.8	18	1.5	1.3	15	2.7	2.1
Myrica (ヤマモモ属)											2	0.4	0.3
Juglans (ネグルス属)		1	0.2	0.1				2	0.2	0.1			
Coryrus (ハシバミ属)					9	2.8	2.3	18	1.5	1.3	2	0.4	0.3
Betula (シカクシ属)								1	0.1	0.1	1	0.2	0.1
Alnus (ハンノキ属)		1	0.2	0.1	4	1.2	1.0	5	0.4	0.4	109	19.4	15.5
Fagus (ブナ属)		2	0.3	0.2	6	1.8	1.5				5	0.9	0.7
Lepidobalanus (コナラ亜属)		20	3.3	2.4	99	30.4	25.2	577	46.7	42.1	39	6.9	5.5
Cyclobalanopsis (アカガシ亜属)		37	6.0	4.5	41	12.6	10.4	242	19.6	17.7	12	2.1	1.7
Castanea (クリ属)		2	0.3	0.2	1	0.3	0.3	4	0.3	0.3			
Castanopsis (シノキ属)		6	1.0	0.7	26	8.0	6.6	35	2.8	2.6	1	0.2	0.1
Ulmus (ニレ属)					1	0.3	0.3						
Zelkova (ケヤキ属)					1	0.3	0.3	2	0.2	0.1			
Celtis (エノキ属)					1	0.3	0.3	1	0.1	0.1	3	1.5	0.4
Aphananthe (ムクノキ属)								1	0.1	0.1			
Akebia (アケビ属)											3	0.5	0.4
Prunus (サクラ属)					4	1.2	1.0	23	1.9	1.7	8	1.4	1.1
Skimmia (シヤマシキミ属)					2	0.6	0.5	35	2.8	2.6	1	0.2	0.1
Rhus (ウルシ属)								1	0.1	0.1			
Plex (モチノキ属)											13	2.3	1.8
Acacia (カエデ属)											6	1.1	0.9
Cornus (ミズキ属)											1	0.2	0.1
Diospyros (カキノキ属)											1	0.2	0.1
Symplocos (ハイノキ属)					1	0.3	0.3						
Ligustrum (イボクノキ属)					1	0.3	0.3						
Ericaceae (ツツジ科)					3	0.9	0.8	6	0.5	0.4	2	0.4	0.3
Total		615	100.1	74.6	326	99.8	84.8	1235	100.2	90.3	563	100.2	79.7

付. 興戸宮ノ前遺跡の堆積物の花粉分析結果

No. 2 草本種 (NAP)

TAXON	①現世の耕作土			②SD01埋土の暗灰褐色シルト層の南部 (室町時代, SE)			③SD01埋土の暗灰褐色シルト層の北部 (室町時代, NE)			④SD01底面の青灰色粘土層 (室町時代以前)		
	数値処理			数値処理			数値処理			数値処理		
	検出 実数	草本%	全体%	検出 実数	草本%	全体%	検出 実数	草本%	全体%	検出 実数	草本%	全体%
Fagopyrum (ソ ノハ)	1	0.5	0.1	4	5.8	1.0	9	6.6	0.7	2	1.4	0.3
Pertya (コヤボウキ属)							4	2.9	0.3	3	2.1	0.4
Artemisia (ヨモギ属)	32	15.5	3.9	11	16.4	2.8	21	15.4	1.5	17	12.1	2.4
Petasites (フキ属)	2	1.0	0.2							2	1.4	0.3
Xanthium (オナモミ属)				1	1.5	0.3				1	0.7	0.1
Justicia (キツネノマゴ属)	8	3.9	1.0							2	1.4	0.3
Haloragis (アリノトウグサ属)							2	1.5	0.1	5	3.5	0.7
Viola (スミレ属)										1	0.7	0.1
Geranium (フクロソウ属)							4	2.9	0.3	2	1.4	0.3
Phaseolus (アズキ属)										1	0.7	0.1
Pulsatilla (オキナグサ属)							1	1.5	0.3	3	2.1	0.4
Thalictrum (カラムツソウ属)										1	0.7	0.1
Nelumbo (ハス属)	2	1.0	0.2									
Nymphaea (スイレン属)										2	1.4	0.3
Rumex (ギンギク属)										5	3.5	0.7
Persicaria (タデ属)	5	2.4	0.6				1	0.7	0.1	2	1.4	0.3
Humulus (カラハナソウ属)				2	3.0	0.5	14	10.3	1.0	7	5.0	1.0
Sagittaria (オモダカ属)										2	1.4	0.3
Typha (ガマ属)	5	2.4	0.6	12	17.9	3.1	6	4.4	0.4	3	2.1	0.4
Cichorioideae (タンポポ科)							2	1.5	0.1	1	0.7	0.1
Carduoideae (キク亜科)	2	1.0	0.2				1	0.7	0.1			
Cucurbitaceae (ウリ科)				1	1.5	0.3						
Solanaceae (ナス科)										3	2.1	0.4
Umbelliferae (セリ科)	2	1.0	0.2	1	1.5	0.3	6	4.4	0.4	6	4.3	0.9
Rosaceae (バラ科)				2	3.0	0.5	1	0.7	0.1			
Leguminosae (マメ科)							2	1.5	0.1			
Cruciferae (アブラナ科)	10	4.9	1.2				3	2.2	0.2	1	0.7	0.1
Caryophyllaceae (ナデシコ科)	32	15.5	3.9	1	1.5	0.3				3	2.1	0.4
Chenopodiaceae (アカザ科)							5	3.7	0.4	1	0.7	0.1
Amaryllidaceae (ヒガンサ科)							1	0.7	0.1			
Araceae (サトイモ科)				5	7.5	1.3				2	1.4	0.3
Cyperaceae (カヤツリグサ科)	3	1.5	0.4	1	1.5	0.3	20	14.7	1.5	6	4.3	0.9
Commelinaceae (ツククサ科)										2	1.4	0.3
Gramineae (45μ以上) (イネ科)	93	45.1	11.3	13	19.4	3.3	24	17.6	1.8	25	17.7	3.6
Gramineae (45μ以下) (イネ科)	9	4.4	1.1	12	17.9	3.1	10	7.4	0.7	30	21.3	4.3
Total	206	100.1	24.9	67	99.9	17.4	136	99.8	9.9	141	99.7	19.9
AP + NAP Total	821			393			1371			704		

3. 郷土塚古墳群試掘調査概報

3. 郷土塚古墳群試掘調査概報

例 言

1. 本概報は、宅地開発(事業主体：株式会社グリーン地所)に伴って、田辺町教育委員会が実施した田辺町大字薪小字島に所在する郷土塚古墳群の試掘調査の概要報告書である。
2. 調査の期間は、昭和56年2月2日から昭和56年2月5日までである。
3. 調査の組織は下記のとおりである。
調査主体者 田辺町教育委員会教育長 敷下徹一
調査担当者 田辺町教育委員会社会教育課社会教育主事 西川英弘
調査事務局 田辺町教育委員会社会教育課(課長 博田武則)
調査協力者 株式会社グリーン地所
4. 調査後の遺物整理・図面整理・整図は、主に小林豊彦・山田温久・瀧野一太郎・西川英弘が行った。
5. 調査を実施するにあたっては、奥村清一郎(京都府教育庁指導部文化財保護課)氏から有益な指導をうけた。
6. 本概報の執筆者は文末に示した。編集は西川が行った。

1. はじめに

昭和55年10月に大阪市内の株式会社グリーン地所より埋蔵文化財の所在の照会があった。

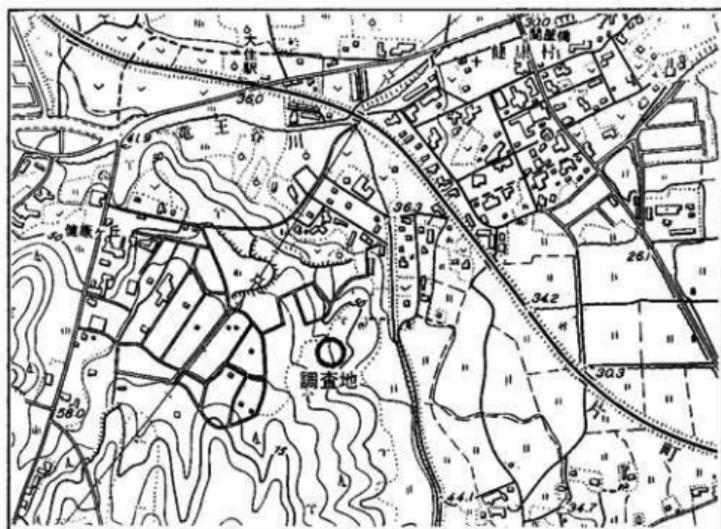
町教育委員会としては、さっそく田辺町大字薪小字島地内の開発予定地におもむき、現地確認を行った。

この区域は、すでに町の開発許可があり、京都府段階での事前協議において文化財保護課で埋蔵文化財の指摘を受けたところである。

このようないきさつの中で調査を実施したわけであるが、調査前の踏査において開発区域外で横穴式石室の用材と思われる石材2個とやや離れて須恵器の杯身・蓋片数個体分を発見した。

その発見した場所から、開発区域内に向かってマウンド状のゆるやかな高まりが認められたため、古墳の可能性を求めて試掘調査を実施した。調査に際して、関係諸氏のご協力を得ることができ、感謝するものである。¹⁾ (西川英弘)

2. 調査概要



第13図 郷土塚古墳群調査地位置図

(S=1:2,500)

2. 調査概要

開発地区は、旧所有者がすでに自然地形を大幅に変更した形跡があり、今回の調査はあまり自然地形が損なわれていない箇所を選定し、トレンチ調査を実施した。

トレンチを設定した箇所は、開発地内の南東に位置し、なだらかな丘陵稜線上の北斜面である。調査は、地山の確認を目的として進め、北側を第1トレンチ、南側を第2トレンチとした。第1トレンチは4m×4m、第2トレンチは2m×2mをそれぞれ測る。

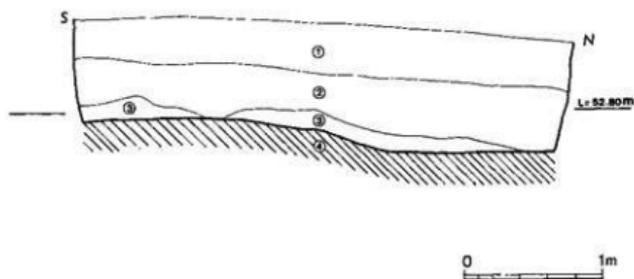
第1トレンチでは、表土層を掘り下げていく中で表土下80～90cmぐらいの深さで地山上面に達した。地山上面は、トレンチ中央で軽い段落をなして北に下がっている(第15図)。しかし、この段落も遺構としての意味をもたないものであることは、地山上面に達するまで表土層(現代層)一層のみで遺構埋土もしくは純粋な包含層は全く検出されていないことから判断できる。

第2トレンチにおいては、表土下40cm前後の深さで地山上面に達し、第1トレンチ同様表土層のみで遺構の検出はなかった。

なお第1トレンチのやや南西で、原位置をとどめない石室材と思われる巨石を業者の話で確認し、ブルドーザーで置土を除去し巨石を業者の協力を得て掘り出した。この巨石は、田辺中央公民館裏にて展示を行っている。さらにブルドーザーを借用して置土を完全に除去してもらったと



第14図 トレンチ位置図



- ①暗褐色砂質土
- ②暗褐色砂質土(ブロック状に黄褐色土を含む)
- ③黄褐色砂質土(3cm以下の隙を含む)
- ④地山

第15図 第1トレンチ西壁断面図

4. まとめ

ころ、地山上面から土師器・須恵器・弥生土器等の破片を採集した。

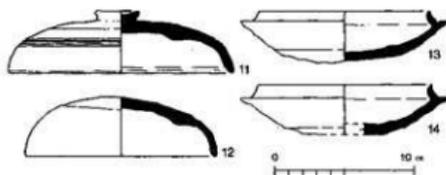
調査の結果として、トレンチ内では遺構の存在は認められなかった。しかし、トレンチ内外において須恵器等の出土遺物があるため、今後この付近の開発に際しては十分注意する必要がある。

(西川英弘)

3. 出土遺物(第16図・図版第17)

調査地内(トレンチ)では、表土層から地山層まで基本的には現代層1層のみであったため、出土遺物については、トレンチ内出土のもの(1~10)と表採のもの(11~16)とをあわせて説明する。表採資料のうち、11~14は調査地の南接地で今回採集したものである。15・16は古墳群の周辺でかつて採集されたものである。遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・近世陶器・染付磁器等がある。

1は弥生土器の壺体部片で、外面に7条の横直線文と波状文が施されている。2・4・6は土師器で、6は碗の口縁部である。3・7・10は須恵器で、3は古墳時代の杯身、7は奈良時代の杯身、10は甕の体部片である。5は瓦器片で、内面に暗文をもつ。8は備前焼の播鉢、9は染付磁器である。



第16図 周辺採集土器実測図

図示した11~14は須恵器の蓋・杯身である。11は高杯の蓋で、天井部の中央につまみを有し、口縁部との境に3条の凹線がある。口径16.0cm、器高4.5cm。12は杯の蓋で、丸みのある天井部をもつ。口径13.6cm、器高4.3cm。13・14は杯身で、受け部と内傾するたちあがりをもつもの

で、ロクロケズリの範囲はせまい。口径12.4cm、器高3.6~3.7cm。いずれも焼成良好で灰色を呈し、概ね、陶邑編年²⁾のTK209型式に相当すると思われる。

15はかつて西川滋氏によって紹介された³⁾鳥形埴輪で、16はこの古墳群に北接する狼谷遺跡より採集された弥生土器の壺棺である。

(鷹野一太郎)

4. まとめ

郷土塚古墳群は、今回の調査が初めてであり、古墳の可能性を求めて試掘調査を実施したわけであるが、上記のとおり現代層一層のみで遺構は検出できなかった。しかし、現代層からも弥生土器片・須恵器片・土師器片等の出土遺物があるため、この調査地付近に遺跡の存在する可能性は十分想定できる。

3. 郷土塚古墳群試掘調査概報

郷土塚古墳群は、一応1号墳～5号墳までの5基で構成されているが、近年の宅地開発等で自然地形が相当損なわれており、古墳群本来の基数・内容等については、ほとんど明らかにされな
いま現在に至っている。このような状況のもとにおいて実施された今回の調査は、古墳群の復
元的作業を進める端緒となる調査として重要な意義をもつものといえよう。今後、周辺の開発
等に際しては、より綿密な行政指導を進めていきたい。(西川英弘)

注

- 1) 小林豊彦, 山田温久, 吉川裕志, 伊東和孚(調
査補助員), 南旨光(作業員)
- 2) 田辺昭三『陶邑古窯址群I』(昭和41年)
- 3) 西川滋『京都府田辺町郷土塚2号墳出土の鳥形
埴輪』(『古代学研究』20, 昭和34年)

4 . 権現塚古墳発掘調査概報

4. 権現塚古墳発掘調査概報

例 言

1. 本概報は、道路建設(事業主体：田辺町)に伴って、田辺町教育委員会が実施した田辺町大字三山木小字山崎に所在する権現塚古墳の発掘調査の概要報告書である。
2. 調査の期間は、昭和46年3月1日から昭和46年3月14日までである。
3. 調査の組織は下記のとおりである。(職名は調査当時)

調査主体者	田辺町教育委員会教育長	敷下徹一
	田辺町文化財保護委員会委員長	南 元彦
調査委員	日本考古学協会会員	宇佐晋一
	日本考古学協会会員	木村悽三郎
調査主任	大阪教育大学講師	江谷 寛
調査員	田辺中学校教諭	栗野 謨
調査補助員	大谷大学学生	吉村正親、松田祥子
調査事務局	田辺町教育委員会社会教育係	(博田武則)
調査協力者	田辺町長	原田喜代次
4. 調査後の遺物整理・図面整理・整図は、主に江谷寛・栗野謨が行った。
5. 調査を実施するにあたっては、宇佐晋一(日本考古学協会会員)・木村悽三郎(日本考古学協会会員)の各氏から有益な指導・助言を得た。
6. 本概報は、調査担当者が分担執筆し、文責は本文の末尾に示した。編集は西川が行った。

1. はじめに

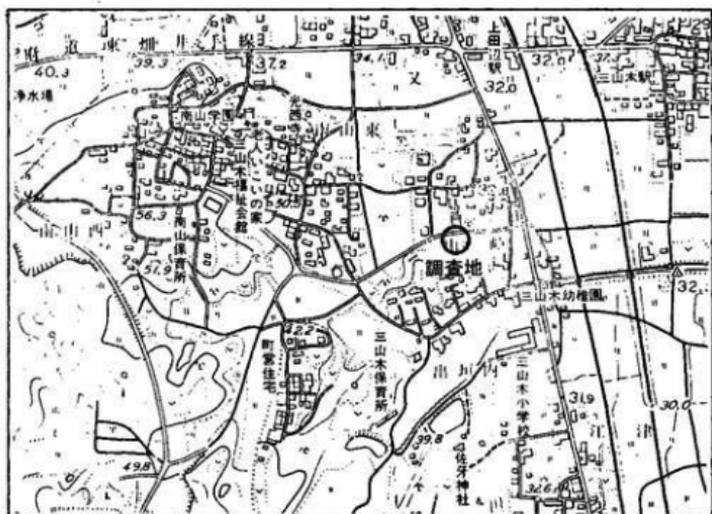
田辺町は、昭和45年度地方改善事業の一環として、田辺町大字三山木小字山崎地内に府道木津八幡線に通じる東西方向の新設道路を計画した。この道路工事により権現塚古墳の一部分が削除されることが判明し、建設課は町教育委員会を通じて、京都府教育庁指導部文化財保護課に連絡し、技師の派遣を依頼した。

一方、田辺町は、本古墳が国有地であるため、その一部分の払下げ許可を申請し、後日払下げが許可された。

京都府文化財保護課は、技師を派遣して現地調査を実施し、本古墳をできるだけ保存するよう指導した。しかし、やむを得ぬ事情で道路工事が当初の計画どおり実施されることになったため、

2. 位置と環境

昭和46年2月4日に関係課の担当者で打合せを行った。その結果、墳丘の削除予定部分を対象とする事前の緊急調査が実施されることになった。(栗野 謨)



第17図 権現塚古墳調査地位図

(S=1:2,500)

2. 位置と環境

権現塚古墳は、京都府綴喜郡田辺町大字三山木小字山崎21番地に位置する。

南部山城のせまい盆地の中央部を南から北へ流れる木津川の左岸には、生駒山脈から男山丘陵にのびる100mまでの洪積丘陵地帯が続いている。この丘陵地帯は、田辺町大字三山木付近において普賢寺川の侵蝕によって形成された普賢寺谷があり、この溪口の南側はさらに低洪積丘陵(標高40~50m)が続き南下している。

三山木小字山崎地区の集落は、この丘陵に位置し、著名な山崎古墳群もここに存在している。権現塚古墳(山崎八王寺塚古墳)は、「この古墳の南西約1町を距てて同じ丘陵の端にまた丸塚あり。周囲削られて、やや形崩れたるが、径約6間、高さ1間半の封上を遺存して上に石塔の一部を置く」云々と報告されている¹⁾。

また山崎古墳群の西に南山丘陵があり、弥生式遺跡地として知られ、石鏃や土器片が出土し、その南に西羅遺跡が位置し、大型始刃石斧の発見が報告されている²⁾。

普賢寺谷の溪口の北側は、標高70~80mまでの丘陵先端には有名な三山木弥生式遺跡があり、

4. 権現塚古墳発掘調査概報

弥生式住居跡が昭和42年7月発掘調査され、弥生式土器や異形銅器、刀子などが発見されている。³⁾

また、その南には江津古墳・葛原谷古墳・宮ノ口古墳など多くの後期古墳群が存在している。⁴⁾ これらの古墳群のさらに南部に佐牙神社がある。記録に「佐牙乃神九戸」⁵⁾と古くより社のあることがわかる。その西に白鳳年間の古瓦を出土する三山木廃寺⁶⁾が存在している。

以上述べたとおり、三山木は縄文時代より弥生時代を経て古墳時代さらに奈良時代まで続く地域であり、特に飯岡・三山木・興戸・普賢寺を結ぶ地域は、南山城古代文化史上注目すべき地域である。なかでも古墳文化の重要な役割をもつ地域と考えられ、権現塚古墳もこの一部をなしているのである。 (栗野 謙)

3. 発掘調査日誌(昭和46年)

・3月1日

午前8時30分、町教委職員と調査員立合いのもとに、作業員3人による権現塚古墳一部削取部分のみの立木を伐採し、樹令80年以上の松の巨木を倒す。中心の墓石清掃中、慶応2年云々と墨書した木札および関係品を発見し、関係品乾燥の上町教委に保管する。

・3月11日

発掘調査を開始する。新設道路に平行して削取部分に幅1.5m、長さ3mのトレンチ3ヶ所を設定する。第1トレンチの表土下3~4cmの土中より土師皿など折構用関係品が出土する。

各トレンチ地山のラインまで、平面的にトレンチの表土より層位的に掘る。午後、一応地山の線を出し、各トレンチの壁面を清掃する。

・3月12日

北側の竹林に第4トレンチ(北側削取部)を設定したが、竹の伐採について地元と協議する。道路中心点より4mの地点を設定し、表土下約20cmぐらいにおいて、変色土に達し、さらに10cmぐらいで地山のバラス黄褐色粘土層に達した。

弥生式土器と思われる破片および土師器の破片が出土。第4トレンチの東側に第2トレンチの延長線を引き、第5トレンチを設定し、南側トレンチと北側トレンチのセクションを出す。

権現塚古墳の中央部の石碑付近に空洞があるのではないかと聞いているので、念のため竹棒を入れると1.4m以上も入りこんだ。盗掘か何かの遺構か不明で、今回はこの遺構の調査ではないので中断した。なお地元の古老の話によると、2~3回以上盗掘を受けているとのことである。

・3月13日

各トレンチに水準線を設定し、断面図の実測開始。特に第2トレンチより第5トレンチの断面の実測を始める。また本古墳の150mの地点(第4・第5トレンチの地続き)に土師器を伴う遺物包含層があり調査し、地山のラインまで出す。

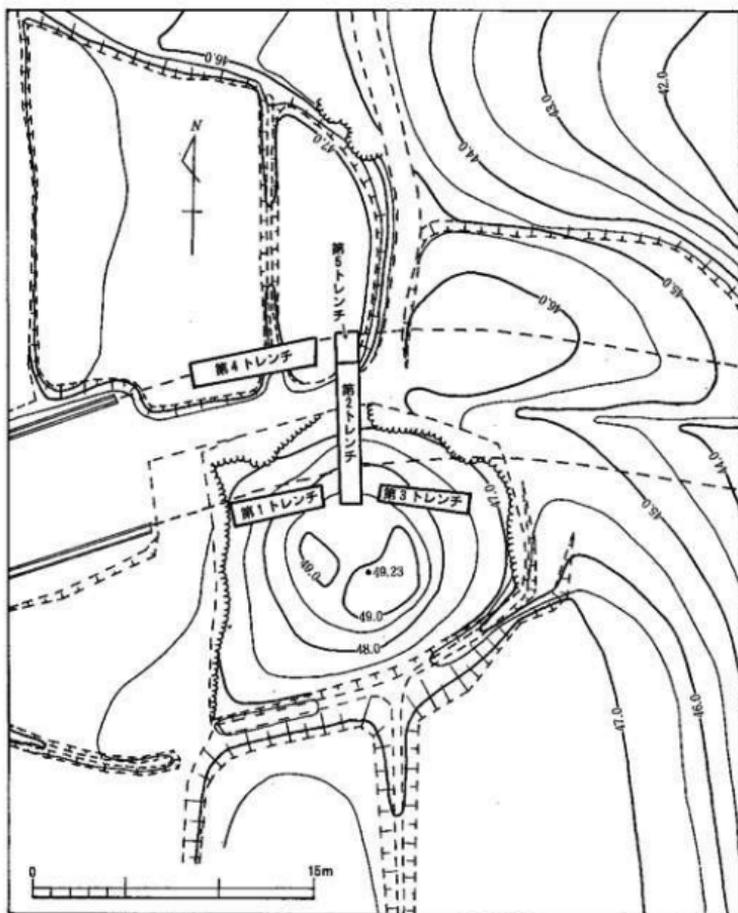
・3月14日

午前8時30分より、地形図1/200にトレンチの位置を記入し、写真撮影を行う。工事開始後の

3. 発掘調査日誌

立合い調査を除いて、いちおう調査を終了する。

(栗野 謙)



第18回 周辺地形図

4. 発掘調査の概要

(1) 遺跡の状況

当初この遺跡を見た時、円墳状の墳丘とその北側に続く南北に長い台状の部分があり、前方後円墳の可能性があると考えられた。

その最北端にあたる所で、2ヶ所が大きくえぐられて地山が露出していたが、ここに塹の口縁から肩にかけての破片を採集した。色は淡黄色で、水こしの細かい胎土を用い、あたかも土師器のようなものであった。

道路は、円墳状の部分と前方状のくびれの東側で二又になって、1つは前方状の部分に沿って北側へのびる道と、他は東方へくだっていく細い道とになっている。くびれ部分から西側は、すでに幅7mの道路が完成ま近になっている状態であった。道路面では、標高46m、墳丘の頂上は49.23mで北高は約3mである。

円墳上の部分には、東・西・北で裾の方がかなりえぐられて、地山が露出しており、正円に近いが、南西部にかけて流出したように形がひずんでいる。

(2) 墳丘の調査

地形図を作成し、道路計画に合わせたところ、道路によって切断される部分は、道路敷きと法面を合わせて、墳丘の約1/4であることが判明したため、この部分だけを調査することとし、これが果たして古墳の墳丘かどうか、古墳とすれば円墳か、前方後円墳か、埋葬施設がどうなっているか、という点を考えながら調査を進めることにした。また調査によって破壊される部分を最小限度にとどめるため、まず法面にそってトレンチを設定した。

第1トレンチと第3トレンチを道路敷きおよび法面に平行して設定し、これと直角になるような形で、その中間に第2トレンチを南北に設定した。次いで墳丘の北側および前方部と思われる所にも、道路敷きに平行して第4・第5トレンチを設定した。

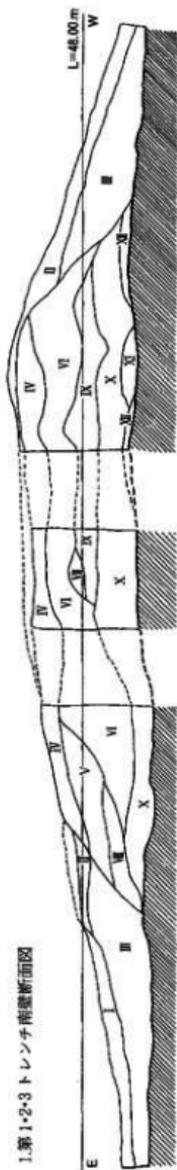
第1～第3トレンチでは、表土下1.2～1.4mで地山に達したが、この3つのトレンチを連続した形で断面を観察すると、地山はほぼOP 47.2～47.3mの高さで水平にあり、墳丘は直径約15mぐらいになっていた。ところがこのトレンチでは、表土から地山までが表土を含めて6層の堆積が認められた。(第19図・付表4)

これらの堆積からみると、地山から上には主として4つの堆積があって、最初の墳丘はもう少し小さいものと考えられる。つまり4つの堆積層の最下層とみられる暗褐色土は、断面では東西8mぐらいになっていながら、復原すれば最下層で直径約10mぐらいになる。

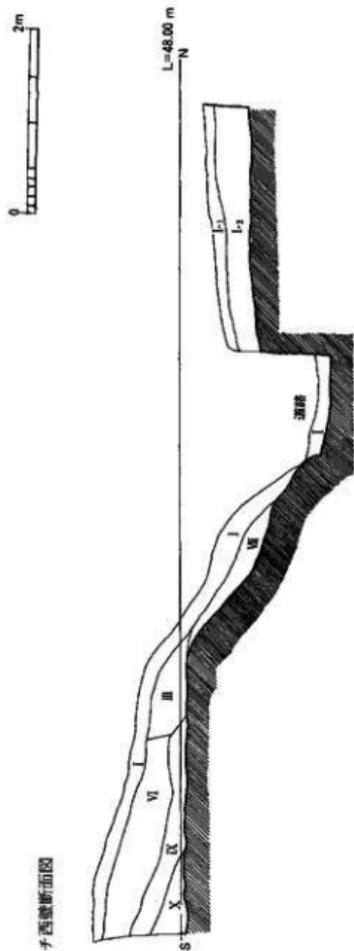
これが、もとの墳丘でそのまわりには上から流出した土砂が堆積している状態が判明した。しかもこの最下層の土には、弥生式土器を含んでいることからみて、どこか近くの弥生時代の遺跡から運ばれてきたものと思われる。したがって、この墳丘の形成された時期が、弥生時代後期よ

4. 発掘調査の概要

1. 第1・2・3トレンチ南壁断面図



2. 第2トレンチ西壁断面図



第19図 断面図

りも古くならないことがわかる。

つぎに南北の断面からみると、ここでも同じく水平の地山の上に2～3層の堆積があって、そのまわりに流れ出た堆積があり、全体に表土がおおっている。その北端部は、道路によって深く切断されているが、この墳丘が北側の台状の部分とは別のものであることが断面図からわかる。

道路より北側では、OP 46.7 mで水平な地山があって、その上には、竹藪の土がのっている。このことは、第4・第5トレンチで共通していることである。さらに、反対側の南方部でも墳丘に続く広い台地状の部分があるが、全て地山の露出がみられることから墳丘とは関係のないものと考えられる。

以上のことから、この遺跡がもとは直径10mぐらいの円墳であることが確認された。なお埋葬施設については、トレンチの断面ではほぼ水平に4層の堆積がみられただけで、石室や木棺などを検出することはできなかった。

(3) むすび

5ヶ所のトレンチによる断面と出土遺物からみて、上述のようにこの遺跡は直径10mぐらいの円墳であることが判明したが、地山の上に堆積した土が人工的なものであることは、下層から弥

付表4 第1・2・3トレンチ南壁断面考察

層	考 察
第1層	表土で所々盜堀や流出が見られるが全体に約20cmぐらいである。
第2層	小さい礫の混入した黄色土で厚さ20～30cm
第3層	礫の混入したやや粘質の赤褐色で厚さ50～60cm
第4層	やや粘質をおびた褐色土で厚さ20～30cm
第5層	暗褐色を呈した層で厚さ40cm。この層には弥生式土器および土師器の破片が数点出土した。特に弥生式土器は、後期に近い壺か壺の底部が出土している。
第6層	地山のすぐ上にうすくのったもので粘土の所もあれば砂質になっているところもある。

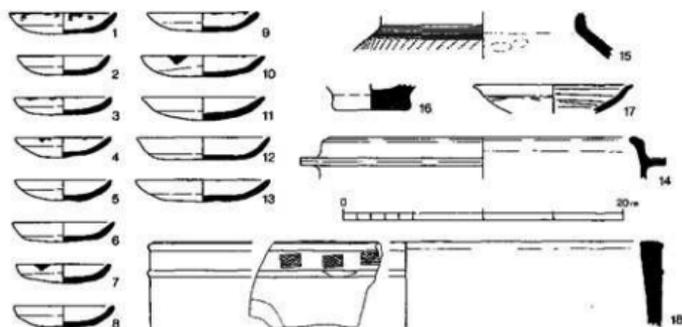
生式土器や土師器片等が出土したことから明らかである。

ただし、埋葬施設がどんなものであったかは、明らかにすることができなかったため、時期についてははっきりしたことは言えない。

(4) 備 考(第20図)

なお、表土から出土した遺物で木札や土器は、この古墳とは直接の関係はないが、後世に至るまでこの古墳の墳丘が信仰の対象とされていたことを物語る貴重な資料である。(江谷 寛)

4. 発掘調査の概要



土師器 1～14(皿：1～13, 土釜：14)
 弥生土器 15・16
 瓦器 17・18(碗：17, 火舎：18)

第20図 出土土器実測図

付表5 出土遺物一覧表

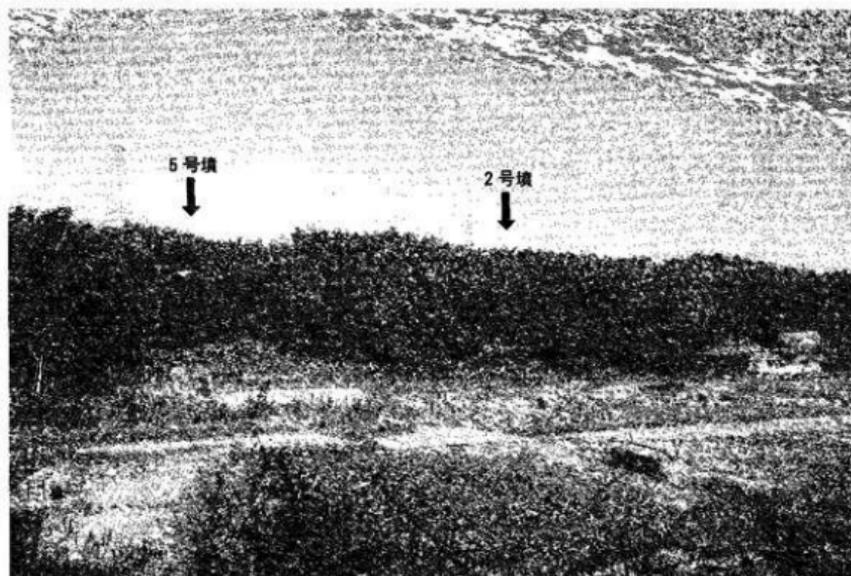
	表土	第2層	第3層	第4層	第5層	周辺地出土
第1トレンチ	灯明皿 土釜 火舎	--	--	土師器	弥生式土器 土師器	土釜 灯明皿
第2トレンチ	灯明皿	--	--	土師器	--	--
第3トレンチ	灯明皿	--	--	土師器	--	灯明皿
第4トレンチ	--	--	--	--	--	--
第5トレンチ	--	--	--	--	--	--

注

- 1) 梅原未治「三山木村山崎ノ石塚ト同地ノ古墳」
 (『京都府史蹟勝地調査会報告』4, 京都府, 大正12年)
- 2) 田辺郷土史会編『田辺町史』昭和43年
- 3) 山田良三『三山木弥生式遺跡発掘調査報告』
 (田辺町教育委員会・田辺町文化財保護委員会, 昭和43年)
- 4) 田辺郷土史会編『田辺町郷土史-古代篇』昭和34年
- 5) 『新抄格勅符抄』
- 6) 梅原未治「三山木村ノ廃寺」(『京都府史蹟勝地調査会報告』2, 京都府, 大正9年)
 梅原未治「三山木廃寺(補遺)」(『京都府史蹟勝地調査会報告』4, 京都府, 大正12年)

圖 版

図版第1 興戸古墳群



(1) 古墳群遠景(南から)



(2) 4号墳調査前全景(西から)

図版第2 興戸古墳群

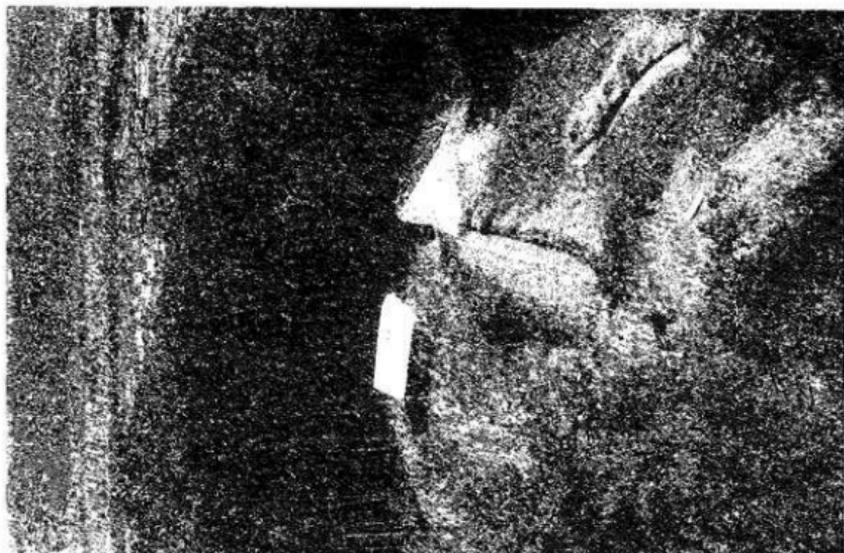


(1) 5号墳調査前全景(東から)



(2) 作業風景

図版第3 興戸古墳群



(1) 馬和部石室(図6・5)



(2) 4号墳全景(南西から)

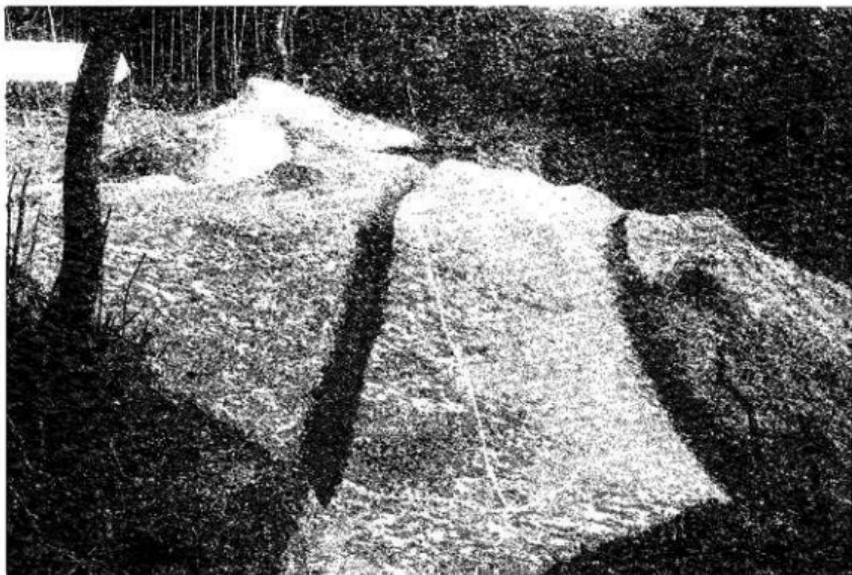
図版第4 興戸古墳群



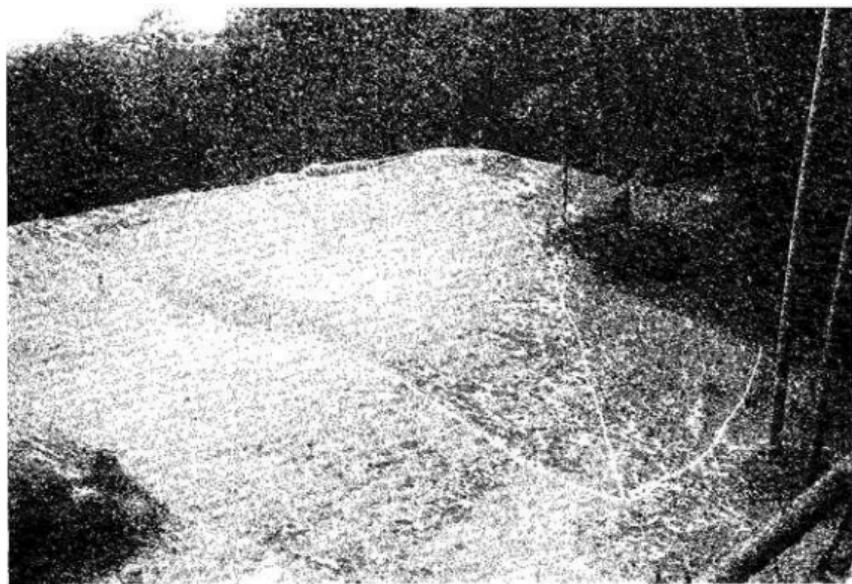
(1) 5号墳全景(南から)



(2) 5号墳全景(東から)

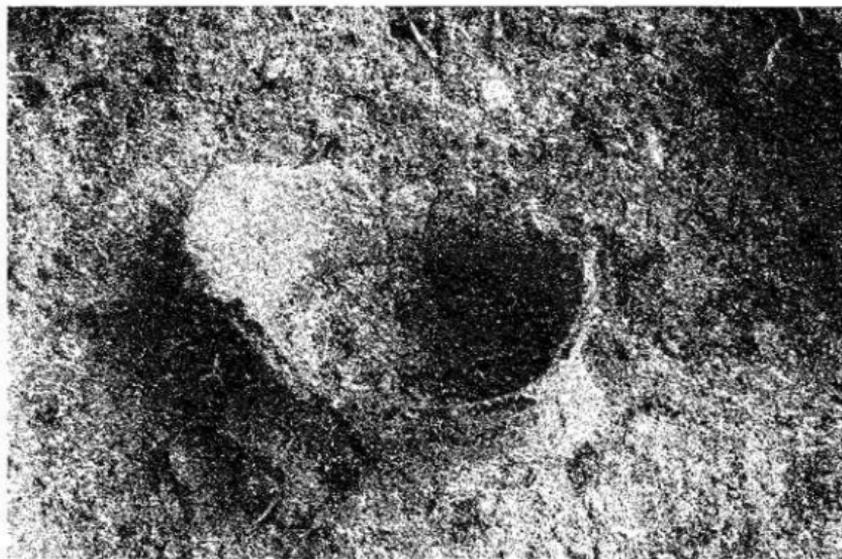


(1) 5号墳北西部



(2) 5号墳北東部

図版第6 興戸古墳群

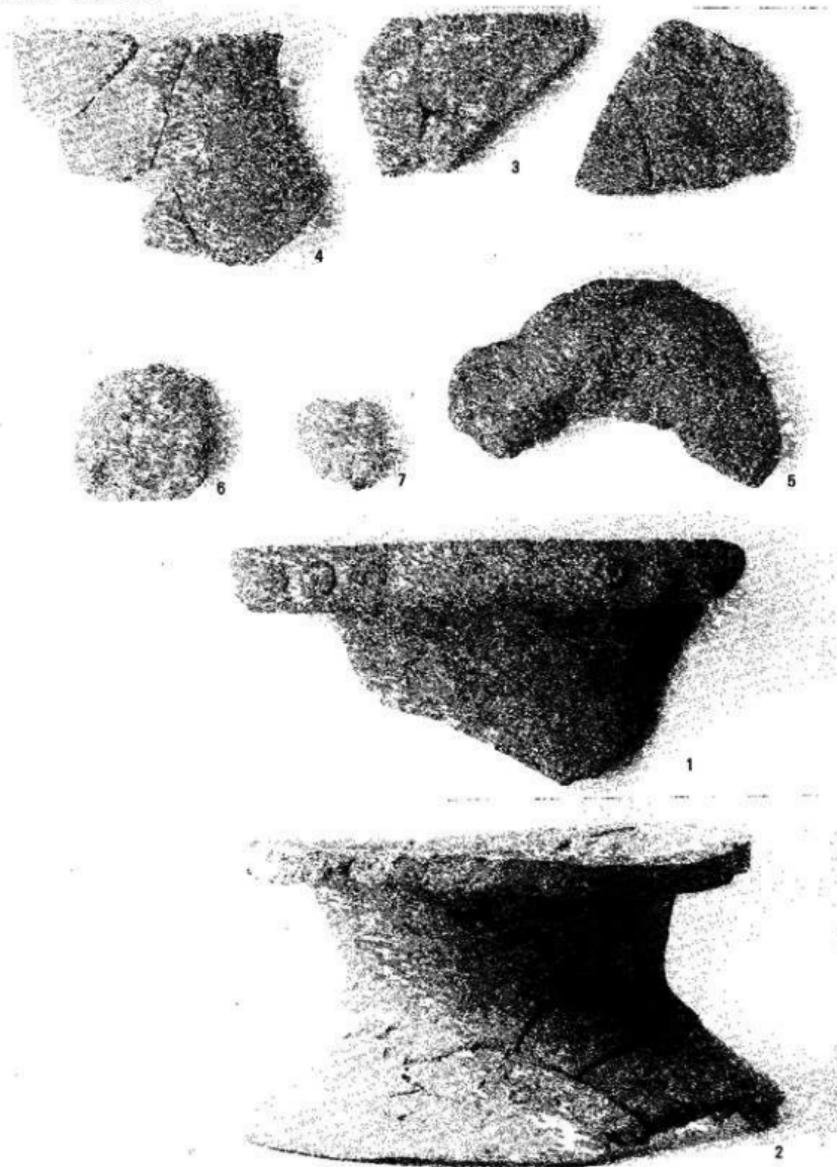


(1) 5号墳弥生土器出土状態



(2) 同 上

図版第7 奥戸古墳群

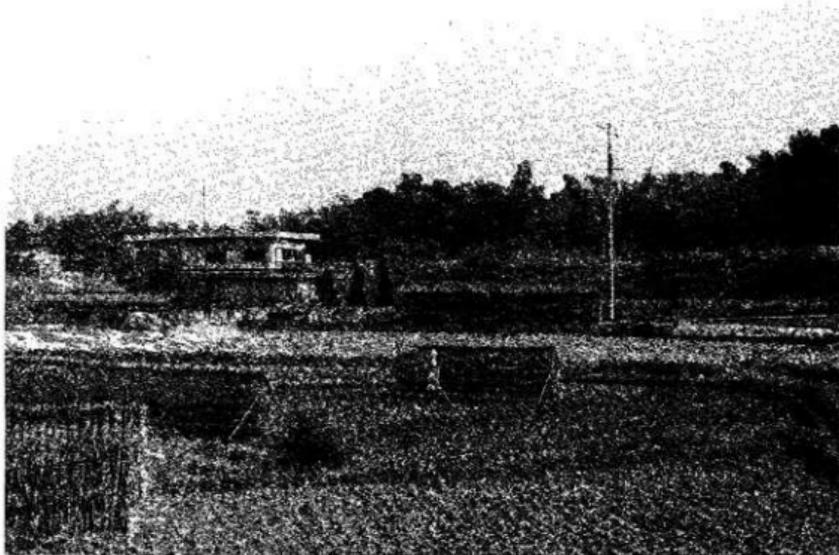


5号墳出土土器

図版第 8 興戸宮ノ前遺跡



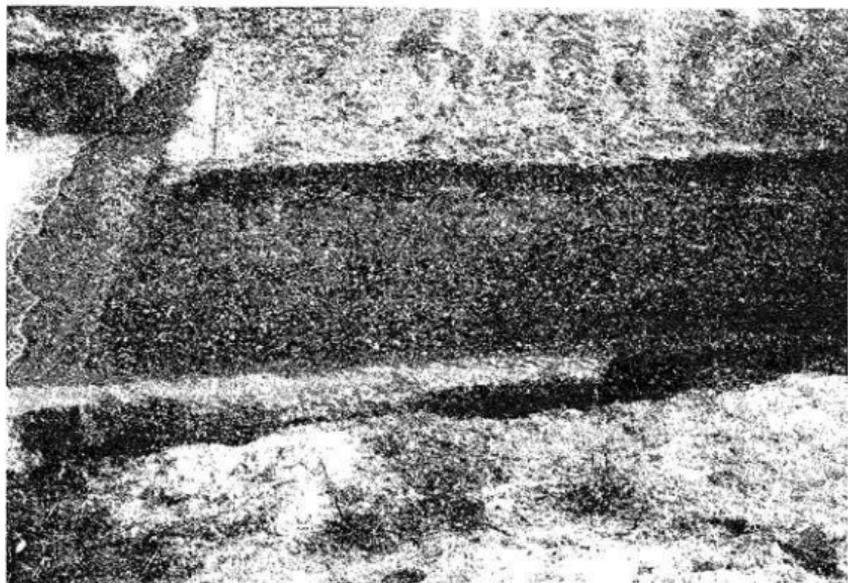
(1) 遺跡遠景(北から)



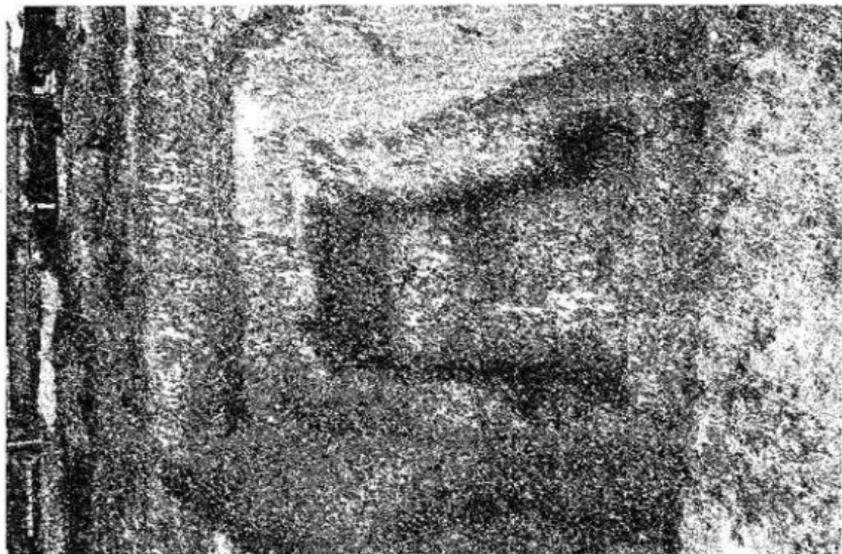
(2) 調査地近景(北から)



(1) No.2 トレンチ全景(北西から)



(2) No.2 トレンチSD01と東壁断面(西から)



① 興戸宮ノ前遺跡(西から)



② 興戸宮ノ前遺跡(北から)

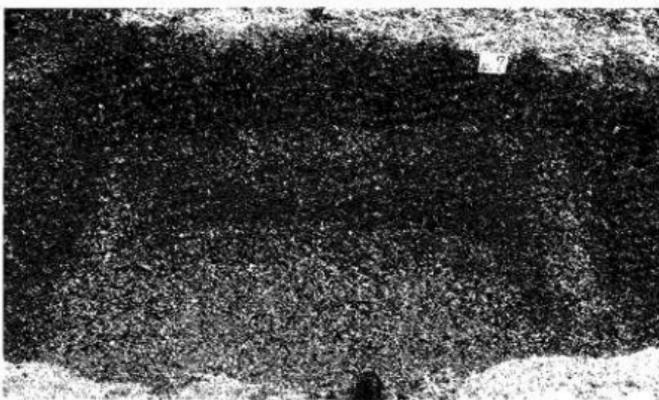


① 興戸宮ノ前遺跡(昭和5)

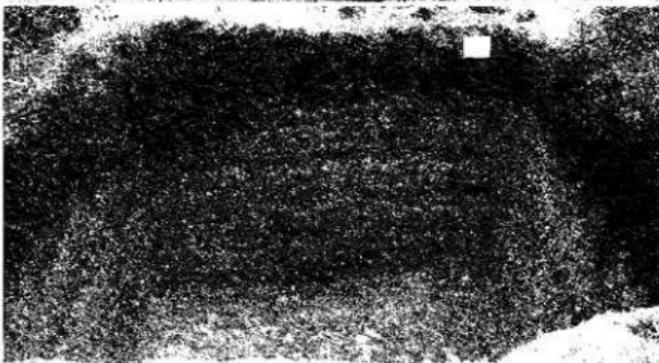


② 興戸宮ノ前遺跡断面

(1)
No 7グリッド(南から)

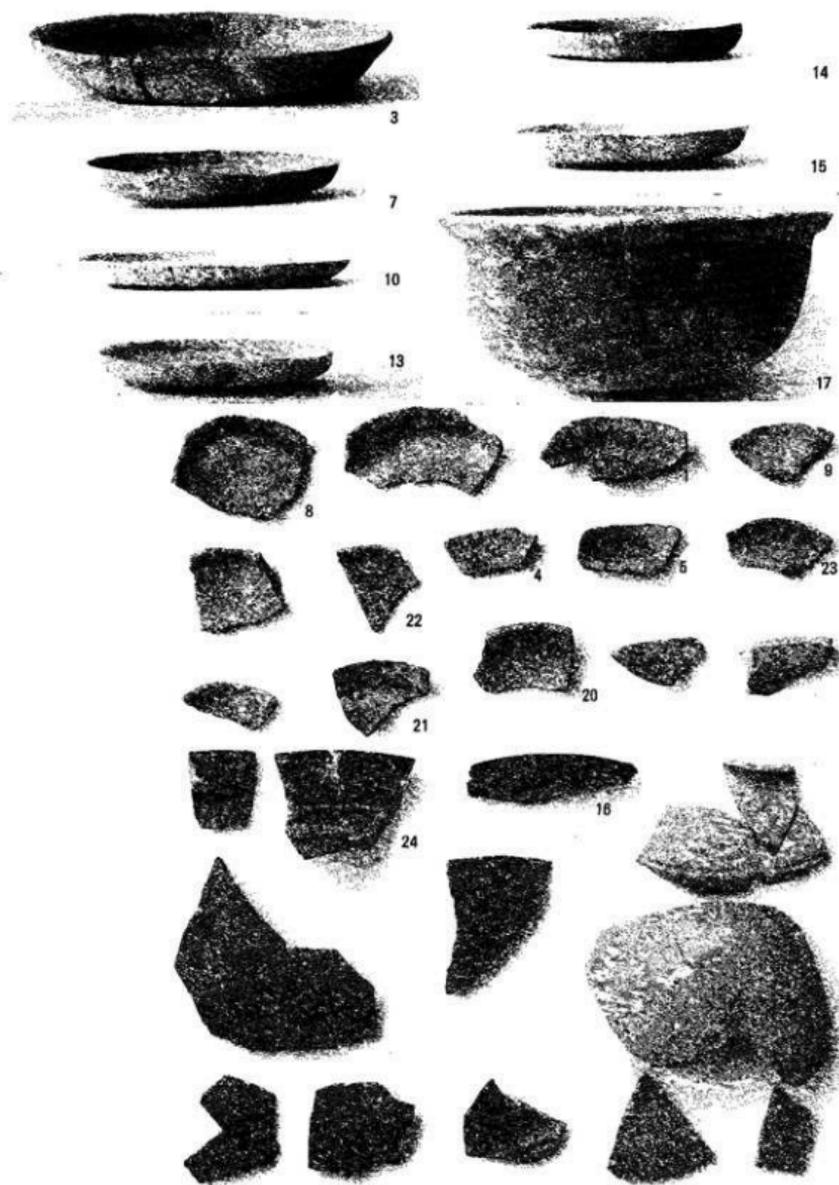


(2)
No 11グリッド(南から)

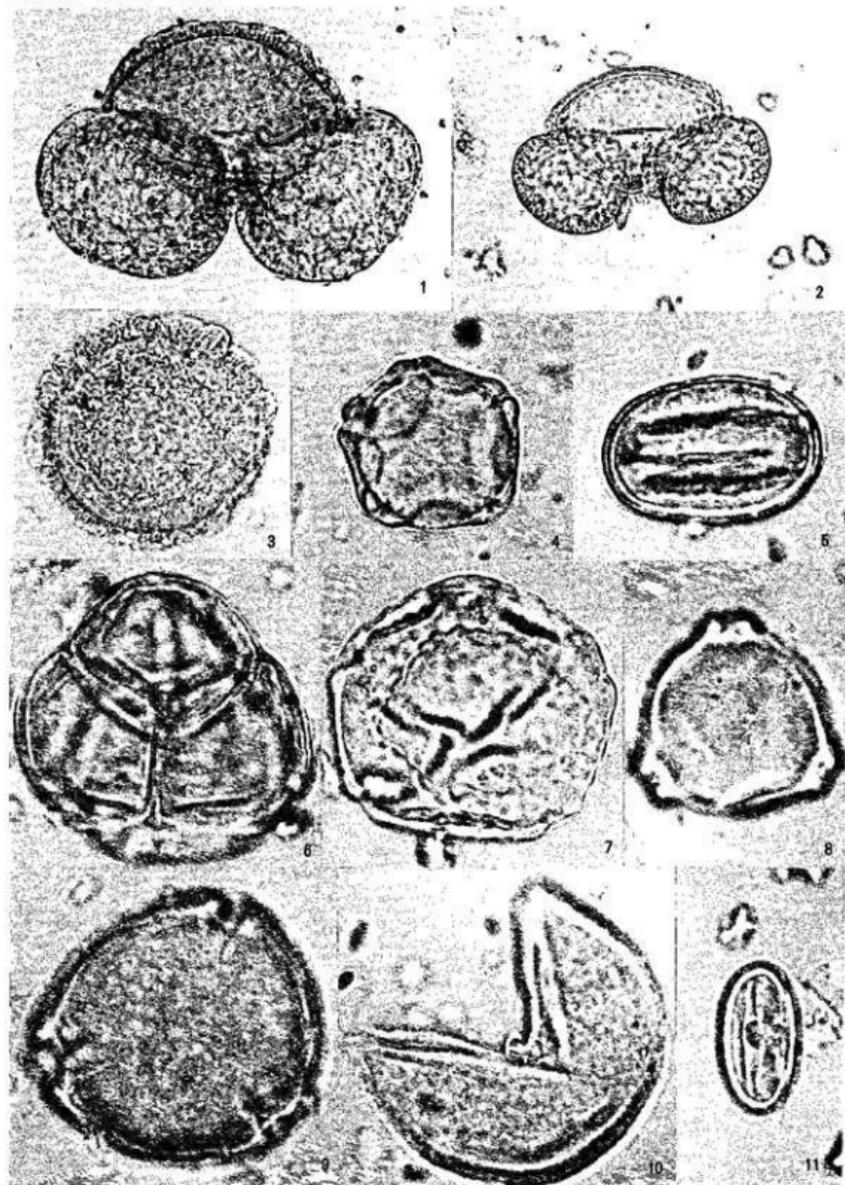


(3)
作業風景(No 2トレンチ)



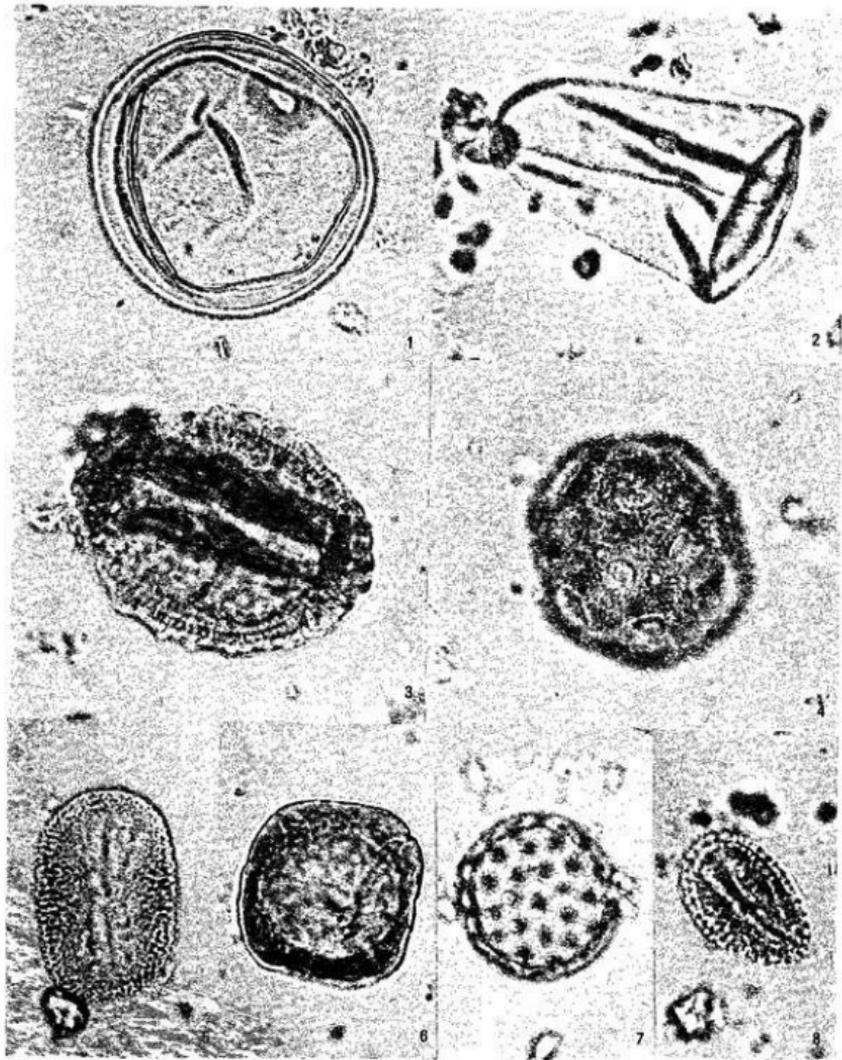


出土土器



花粉の顕微鏡写真(1) 1~3 ($\times 500$), 4~11 ($\times 1,000$)

1. *Picea* (トウヒ属), 2. *Pinus Diploxylon* (二葉マツ亜属), 3. *Tsuga* (ツガ属), 4. *Alnus* (ハンノキ属),
 5. *Lepidobalanus* (コナラ亜属), 6. *Eriaceae* (ツツジ科), 7. *Zelkora* (ケヤキ属), 8. *Betula* (シラカンバ属),
 9. *Fagus* (ブナ属), 10. *Cryptomeria J* (スギ属), 11. *Cyclobalanopsis* (アカガシ亜属)

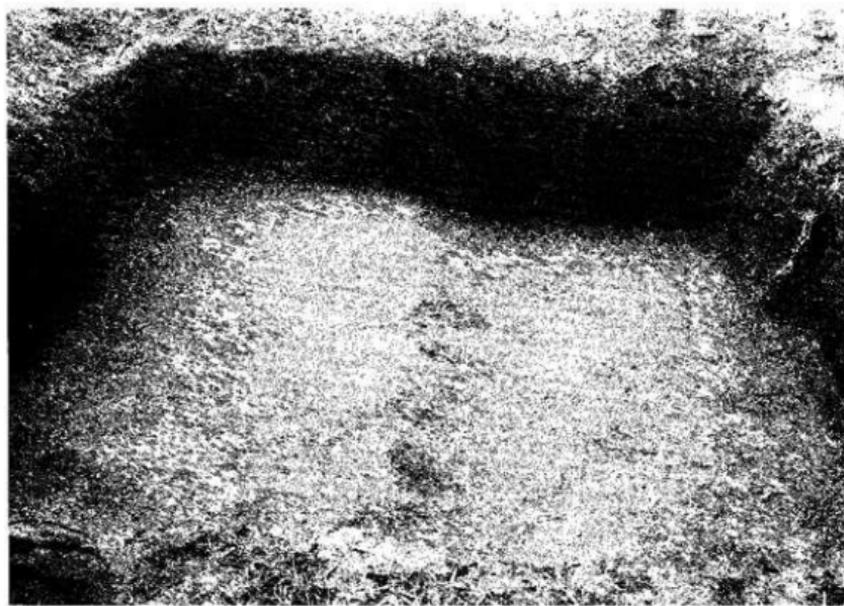


花粉の顕微鏡写真(2) (×1000)

1. Gramineae (イネ科), 2. Cyperaceae (カヤツリグサ科), 3. Pertya (コウヤボウキ属)
4. Caryophyllaceae (ナデシコ科), 5. Justicia (キツネノマゴ属), 6. Haloragis (アリトウグサ属),
7. Chenopodiaceae (アカザ科), 8. Ilex (モチノキ属)

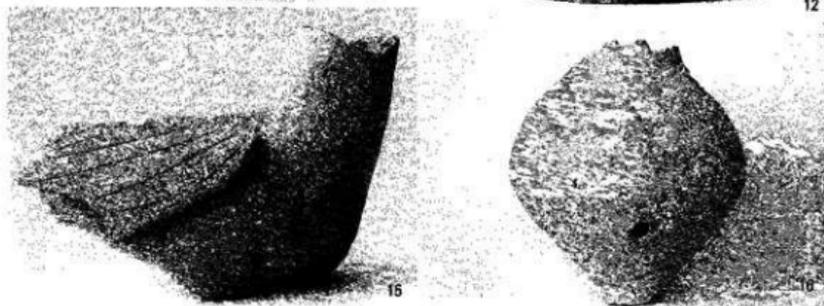
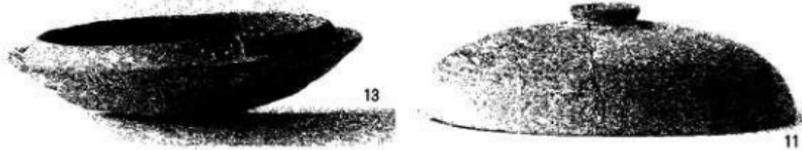
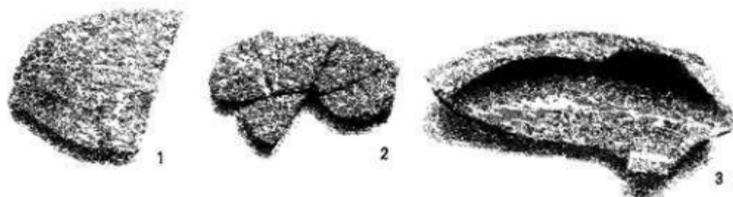


(1) 調査地全景(西から)



(2) 第1トレンチ完掘状態(東から)

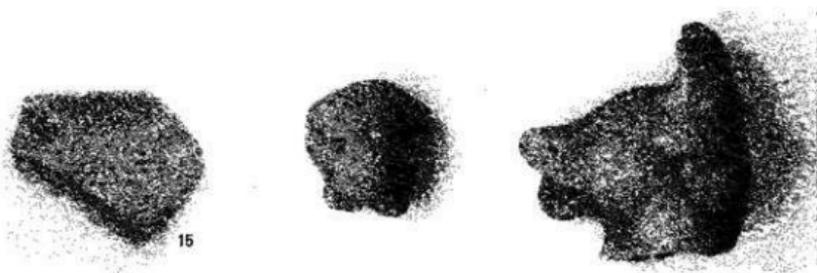
図版第17 郷土塚古墳群



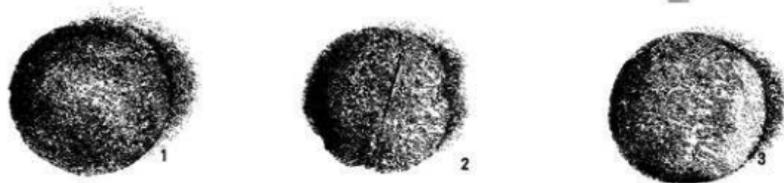
出土遺物



(1) 作業風景(北から)



(2) 出土遺物(左一弥生土器, 中・右一伏見人形)



(3) 出土遺物(土師器皿)

昭和56年3月30日印刷

昭和56年3月31日発行

田辺町埋蔵文化財調査報告書第2集

編 集 田辺町教育委員会
発 行 京都府綴高郡田辺町田辺丸山214番地
電話 07746-2-2552

制 作 ビクトリー社
京都府中京区油小路錦上る
電話 075-221-1420